

ՅԱՅ'Ն ՄԻՋԻ



ՆԱԽԵՆ ԴՏԱՆԻ ԿԵՆՏՐԱԼ ԿՈՆՍԵՐՎԱՏՈՐԻԱՏ
ՍԵՐԻԱԿԱՆ ԿՈՆԿԵՐՏԱՆԻ ՄԻՋԻ

ՔԱՆԱԿԱՆ ՔԱՆՈՒՆ

ԳՐԱԴԱՐԱՆԻ ԵՎ ԼԵՐԱԿԱՆ ԿՈՆՍԵՐՎԱՏՈՐԻԱՏ

エルの日記

これは一人の少女の物語

そしてこれは新生へと続く物語

この物語は、株式会社スクウェア・エニックスが提供するゲーム「ファイナルファンタジーXIV」の2次創作です。2012年末までに公開された情報を元に、作者の推測と構想により創作されています。実際の「新生エオルゼア」で語られる世界とは関連性が無いことを念頭に、お楽しみください。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

エルの日記

森の都の眠り姫

「眠り姫は今日も、楽しい夢を見ているのですか？」

向こう岸に冒険者ギルド「カーラインカフェ」を望む湖のほとりに、私たち三人はいます。

メガネをかけたインテリラフル君が声をかけてきました。

「ま、良い感じに寝てるんじゃない？ 今日、暖かいしね。」

その声に、快活そうなミコッテ少女が答えました。

眠り姫と呼ばれた私。私は……心が止まっていました。

視線が定まっています。

辛うじてまばたきはしていましたが、その目には何も映っていないように見えます。

「……」

そんな私に、二人は顔を見合わせて。

夢うつつな私を乗せた車いすを押し、二人は湖畔から流れ出す川の下流に向かいます。

「そうそう、ベントブランチに牧場が出来るそうよ。」

「建設は始まったんですか？」

「小屋がいくつか作りかけてるようね。あと、こないだ行ったら水車小屋が出来てた。」

「ふむ、先日は何もなかった気がしましたが……早いですねえ。」

「春になれば、本格的に動きだすんじゃない？ 頑張ってるよ、あそこ。」

「何の牧場でしたっけ？」

「え、それ知らないとか情報遅すぎよ裁判長。チヨコボよ、チヨコボ！」

「悪かったですね……。チヨコボですか？」

二人、ゆつくりと車椅子を押しながら歩いています。

私は二人の姿を、見ているのか、見ようとしているのかさえ、自分が理解できません。

(チヨコボ……)

一瞬。その単語が浮かびます。

「あら、姫も興味があるのかしら！」

ことのほか嬉しそうに、ミコッテ少女が私に声をかけました。

彼女は会話をしながらも、私の視線の動きをずっと気にしていたようです。

「それにしても、よくチヨコボの飼育が認められたものです。卵からですか？」

「そりゃそうじゃないの？」

「たしか、チヨコボの繁殖はイシュガルドが独占していると聞きましたか。」

「そうなんだ？」

「ええ、出荷されるのはオスだけで、メスはイシュガルドから門外不出のはず。やはりあの災害で、方針の変更でもあったのでしょうか。」

「さー、そんな小難しいことは分ないけどさ。チヨコボ、可愛いよ？ 見にいこー。」
季節は2月。

まだまだ寒い時期ですが、よく見ると木の枝に小さな膨らみがあったり、春の訪れを今か今かと待っている雰囲気があります。

もう少し暖くなれば春の訪れを待ちわびた動物たちが一斉に現れるでしょう。

「もうすぐ春だよ、眠ってばかりいないで、そろそろ起きる時間だよ？」

ミコッテ少女が私を覗きこんで、そう声をかけました。

楽しそうでいて、少し、悲しそうな響きでした。私は、

(：：：)

何か言いたかったのかもしれない。

でも、伝えようとした心は、私にすら伝わらず、霞のように消えていきます。何度か心を動かそうと試み、それが出来ないうちに、何をしたかったのかを失ってしまう。

自分の苦しささえ覚えていられない。それが、今の私の状態でした。

そんな思いを知ってか知らずか、

「眠り姫も、そろそろ飽きてきた頃じゃないですか？」

「だよね！いい加減起つきなさ〜いい、エル！」

（！？）

流石にビクッと反応する私。目線を少し、二人に向けて、ちょっとだけ嫌そうな感情が一瞬。

それだけの刺激があつてやっと少しだけの反応がある程度の私の心。

私はある病により、心を伝える事が困難な状態に陥っていました。

あ、ご心配なく！多分あと一か月ほどで回復する予定なんですよ。私がこんな病気にかかる羽目になったのは、この二人との出会いに遡る、一連の事件がきっかけでした。

こんな私ですが、束の間の夢の時間を使って、皆さんに事の顛末を伝える事くらいは出来るかもしれません。

ダラガブの騒乱から始まった第7霊災から始まる5年間の心の冒険。

今、私の心を伝えられるのは皆さんだけ。

もしよろしければ、私の日記に刻まれた、おとぎ話にお付き合ってください。

主人公が取られちゃう！

私はエル。9歳。趣味は日記を書くことです。

ただの日記ではありません。冒険日記です。

私は毎日、冒険の主人公になって、その活躍を日記に書き記すのが日課です。スーパーヒーローでヒロインです。日記帳は大事な宝物です。

でも最近、主人公が危ないのです。取られそうなのです。

ここ数日の日記は、そんな私のアタフタした様子ばかり。

私を脅かす二人の子は、リムサとウルダハからやってきました。

今から紹介するのは、そんな二人がやってきた、春の日記です。

『子供王国』 3月7日 雨

いま、グリダニアは子供王国です。

ウルダハとか、リムサから、たくさんの子供達がやって来ました。

どちらの国も、去年の災害で大きな被害を受けて、建物を作り直してるそうです。

お空の化け物も居るし危ないので、少し離れたグリダニアに子供を集団疎開させることになったと、先生が言っていました。

子供のほうが大人より多いかも。学校、先生大変そう。

子供王国なので、王様を決めないといけません。みんなの中で一番の冒険談を披露した子が王様になる決まりです。

今のところ、リムサから来た子の話が一番すごいけど、ウソっぽいのでしんぎちゅう。空を飛ぶ船がリムサを守ったんだって。信じられる？

『空飛ぶ海賊船』 3月9日 はれ

リムサを守った船について、今日もしんぎがありました。なぜか裁判になっていました。王様決めるんじゃないかったっけ？被告？はリムサっ子の女の子です。

私は書記役。勉強用以外のノート持ってるの私だけだからって。うーん、仕方ないので、今日はここから、日記代わりに証言メモです。

【被告】

：：それで、何とかしがみついたロープをつたって、（ミズン）マストによじ登って。扉も窓も、もう全部閉まって入れなくて。

上の方で大砲とか魔法とかチマチマ撃ってたけど、全然当たらないの。

そのうちおーきいのがバーン！で、魔法結界があっさり吹き飛んで。そこにもう一発、真正面。もう、クジラが飛んでくるような。

でも、もう逃げられない！って時に、クジラの横っ腹に噛みついたやつが居たんだ。それが空飛ぶ船だったんだよ！うそじゃないよ！

【裁判長】

被告に確認します。「空飛ぶ船」とは、具体的にはなんですか？

リムサの海賊船ですか？帝国艦隊？

【被告】

リムサの新型宇宙戦艦にキマッテルじゃない！宇宙の果てまでブツ飛はすのよ！

【外野】

ちよつとちよつと！あれは帝国の船じゃないかなあ？

【被告】

えー、夢が無いわね！

とにかく、火柱やら雷やら音やらすごくて。大きいものが空でぶつかってて。

でも竜の化けもの凄くて、船も2〜3隻は落ちてた。けっこー頑張ってたけど。

ここから檢察やら弁護士やら言い争いです。私が面倒になったので終了です。そもそも何で裁判？あ、王様決めるんだっけ。とりあえず、裁判長が一番偉いと思いました。

『キャプテン・書記長・裁判長』 4月2日 はれ

私たちの班には、長が三人います。キャプテン（船長）と裁判長。

……あと書記長。私。

新学期になって班分けがありました。そのとき、こないだの裁判騒ぎで中心となった二人と一緒にの班になったです。たいへんです。

【キャプテン】

リムサの女の子、サンシーカーのルーシーちゃん。

夢は提督、キャプテン志望のロマンチスト。女の子らしからぬ特攻思考で、班のみんなを引っ張ってます。体育会系だけど、実は勉強もトップクラス。

【裁判長】

ウルダハの男の子、デューンフォークのレレセナ君。

お金持ち？のメガネ君。理屈っぽいのが玉にきずだけど、誰かの意見に偏ったりしない、周りをよく見る優しい子。ただ、裁判の一件からキャプテンと仲が悪いんだよなあ。

【書記長】

わたし！エルです。グリダニアに住んでいます。ミッドランダーです。

木工ギルドの孤児院暮らし。趣味は冒険日記。でも最近、主人公の座を奪われかけてます。ううう、また返り咲くもん！

手が先に出るキャプテンと口が先に出る裁判長では、裁判長のほうが相当分が悪いと思う。だからって私を間に挟んで言い合いするのはやめてください！

耳が、ばかになりそう……。

そうだ、ドラガブの騒乱について少しお話しておきます。

昨年、A・E・1567年の9月5日に、大きな災害がありました。ドラガブという星からお空の化け物が逃げ出し、大暴れしたのです。その結果、連合軍の壊滅を初め、エオルゼア諸国各地に深刻な被害をもたらしました。

特にリムサ・ロミンサでは全人口の半数が死亡・または行方不明という大きな被害がありました。建物被害についてはウルダハの方が大きかったようですが、周到な避難計画が女王様主導で行われ、人的被害は殆ど無かったようです。

グリダニアは爆心地からやや離れていたため、被害も少なめ（それでも大変だったんですよ！）。ドラガブが墜ちた場所から距離があつたので、将来的な危険も小さいと考えられています。子供王国に選ばれたのはそんな事情でした。のんびりした国ですから。

そんな経緯で子供が押し寄せたグリダニア。

私はすでに押されぎみで、単なる書記役となっています。

あれえ？冒険は？主人公の座は？そんな焦りを感じ始めた4月のはじめ、私を脇役に押しやる、決定的な事件が起きたのです。

『さくランナーが錯乱だー（前編）』 4月5日

最近になってやっと、安心して外で走り回れるようになりました。今日は、去年からずっと延期されていた運動会とお花見を一緒に行おうという、おとながかんがえたすごいおまつりがありました。……

この日の日記の顛末。

今思い出しても悪夢です。日記なのに前後編になるくらいです。

「何でも、ウルダハから聖火ランナーが来るらしいぞ。」

「まだエーテライトも復旧してないのに、大層なことねえ。」

そんな噂を聞きつけ、メイン会場の水車四辻にはすでに多くの人で賑わっていました。

子供たちの運動会の割には大人が多いです。

すでに波乱の予感です。

「ねえ、たいいくさいじつこーいいんって、何するの？」

「祭りを盛り上げればいいのよ！」

「説明が適當過ぎま（バコ！）」

キャプテンは当たり前のように裁判長の頭を叩いて会話を中断するのが日課です。とても可哀そうだと思います。

それはともかく、私たちは三人で体育祭実行委員に立候補していました。

正確には私、立候補していません。巻き込まれました。

そもそも、花見も体育祭も、私は未体験でした。

二人がしきりに「一緒にやろ！」と勧めるので、「うーん、冒険になるなら……」と、つい手を挙げてしまったのです。

やることが分からないのに手を挙げるのは冒険じゃない？

と誤った思考を持っていた自分が憎い。無謀、って言葉を先に覚えるべきでした。今考えるとこのイベントは最初からおかしかった。

一応、徒競走など体育祭関係のプログラムは準備されていましたが、実行委員である私たちにすら詳細は知らされず。

まあ子供だから？大人が準備頑張ってるのかな？と思ってました。

「徒競走のスターター用の銃は私がゲットしたわ！」

「スターターって何するの？」

「あんた、ホント知らないわね……。みんなが徒競走のスタートラインにいたら、ピストルの合図で走り出すのよ。これね。」

そう言っぴストルを取り出す。

実弾はもちろん撃てない模擬銃だけど、結構凝った作りでカッコよかった。

手に取ろうとするとキャプテン、

「おっと、リムサの人間には銃を扱う権利と責任があるの。素人には危険よ？」

生まれで決まるんだ……。模擬銃ですけどね。

そこまで執着が無かった私はそのまま銃を返しました。

今思えばこの時が最後のチャンスでした。

そんな風に詳細が秘密のまま当日。

開会のあいさつの後、ファンファーレと共に場内アナウンスが響き渡りました。

「ウルダハの錬金技術の粋を集めた、トレントと桜を掛け合わせた、名付けて『さくランナ』の入場です！訓練されたサクラの糸乱れぬ行進をご覧ください！」

なにこれ。

聖火じゃなくてサクラが入場してきました。整然と並んだトレント風サクラ達。

いいの？

ねえ、グリダニアって森が神様扱いじゃなかった？

トレントって森の精霊扱いじゃなかったの？

そんな私や信心深い人たちのざわめきは圧倒的多数の物珍しさに押し流されてしまいました。最近のグリダニア民は森への感謝が不足しています。

その時です。不吉な呟きを耳にします。

「ふむ、さくランナーがサクラんだーか。」

裁判長でした。空気が冷たい。まだ肌寒いこの時期にはきつい。

「ふーん、さくランナーがサクラんだーね。」

キャプテンが返します。あーまたこれ、ケンカの流れですね。

「それは、いいわね！」

よくないよ？と思います。

初めて知りましたが、この二人、ダジャレのセンスが同じでした。

そしてさくランナーの列に突入するキャプテン。え、え、え？

「つて、キャプテン、なにをするの……わあ！」

『パーン！』

銃を撃ってはさくランナーを追いついて立てるキャプテン。私はあわてて追いかけ始めます。

「なにしてるのー！」

「あつははは、錯乱だー！」

『パーン！』

逃げ惑う、さくランナーならぬサクラんだー。

残念ながら、このような事態を想定した訓練はされていなかった模様。

「ちよつとキャプテン！やめようよ！」

無理です、追いつけません。それでも必死に駆け寄ろうとして。

大きくジャンプした彼女は、空中で器用に振り向きながら私の眼を捕らえました。そのまま着地して、両手と視線を上には振り上げます。

「ほら、上！」

え？私も釣られて空を見上げます。

舞い上がる花びら。桃色、桃色、桜舞う。混乱の桜トレントたちが作り出す幻想。

ここまで計算してたの？しばし見とれていました。

『パーン！』

「！って、だから駄目だって！」

「あははー、盛り上がれー！ピンク・ピンク・サクラ色ー♪」

「まさに、さくランナーがさくらンダーですね。素晴らしい。」

「変な感心しないで裁判長もあれ止めて！」

『パーン！』

桜色の混乱はその後、森の都を練り歩きました。
そしてその日から4日間、私たちは花びら掃除。
森の都に禁断の桜歴史が生まれた瞬間でした。

「……駄目だ！これダメだ！」

単なる愚痴日記に成り下がってる日記帳に、天を仰いだ私。
こんなことではお姉ちゃんに自慢できないじゃないですか。

スーパードヒーローでヒロインの座を取り戻さないと。

どうやって？その後も私の努力は続きますが、自力で何とか出来るものではなく。

あの二人化け物でした。この後延々と続く無駄なあがきについては割愛します。

さて、スーパードヒーローはともかく、ヒロインの座は私の元に舞い戻ります。その兆しは遥か彼方リムサ・ロミンサで始まっていたのです。

断章 噂は海を超えて

日付は少しさかのぼり、1568年2月のある日。

リムサ・ロミンサ軍令部の一室が、大柄の男の怒鳴り声に支配されていた。

「帝国の動きはどうなってる！バハムートはどこに行った！連合軍、提督たちの行方は？」

「現在のところ、どちらの動向もつかめておりません。調査隊を派遣しておりますが、都市間通信網も途絶えており、報告にはあと数か月が必要と思われる……」

「話にならない！」

軍令部総長エインザル・スラフィルシン大甲将。メルウィブ提督の留守を任されていた彼は、いらだちを隠すこともなかった。しかし士官たちも慣れているのか、それでも淡々と報告を続ける。

「あと、リムサが帝国に守られたのではという噂が流れ始めています。」

「……」

怒りの表情が消える。士官たちにとって、怒りをまとうてる方がエインザルの通常だ。緊張感が漂う。

「続けたまえ。」

「はっ。今のところ『空を飛ぶ船』がバハムートに立ち向かった、という趣旨になっています。当時、主だった市民はミズンマストに収容済みだったため、目撃者自体は少ない状態です。」

「『船』はこの船だと？」

「リムサの新型艦は空を飛ぶらしい、という説が有力ですが、帝国艦隊だという話も流れています。内容も、波動エンジンで主砲が宇宙の彼方まで届くとか、3機が変形合体して愛を唱えるとか。」

「なんだそれは、子供のうわさじゃないか。」

「はい、まさに子供たちが流している噂です。」

「ふむ……」

「ただし、噂が主に流れているのはグリダニア領です。」

「なんだと、どうしてグリダニアで……いやいい、そこは分った。」

先の災害では、リムサとウルダハは共に学校施設に大きな被害が出た。今後危機が続くという想定の下、比較的安全と思われるグリダニアに集団疎開させる協定が結ばれている。

子供たちが噂の出どころというなら、グリダニアでまず広がるというのは当然の成り行きだ。「しかし、グリダニアか……。我が国の威信にかかわる『噂』が他国で流れるというのは、穏

やかじゃないな。手は打ったのか？」

「検討中ですが、なにぶん通信網に被害が出ている状況では早急な指示が行えず……」

「いつそのこと派手にぶちまけるか？ 帝国の支援が無かったらミズンマストの防衛は無しえなかつたと！」

「それは……」

「そして次回トライデントに帝国艦が出ればいい！ 空を飛ぶ戦艦に勝てる海賊などいないだろう。晴れて我が国は帝国領土になる！」

エインザルの笑い声が響く。明るい声と裏腹に、場の雰囲気は氷のように冷えていた。

「いや、これは悪い冗談だったな、すまない。」

「……いえ」

「せめて提督の行方だけでもつかめておればな。」

士官は視線を少し下げる。エインザルは沈思し、告げた。

「いずれ事実を公にする必要があるだろうが、今はまだ早い。ウルダハ・グリダニアの上層部に事実だけを伝え、噂が報道に乗らないよう手を打ってもらえ。紙に情報を残すな。言葉だけなら、いずれうやむやにできる。」

「わかりました、そのように。」

士官が部屋を出た。一人残った男はつぶやく。

「バハムートを止めたのは我ら連合軍なのか？それとも帝国が抑え込んだのか……？情報が足り
りん、情報が……」

奪われた記録

密かに進行している政治情勢も、私にとっては別の世界の出来事でしかなく。

私のちっぽけな日常は、相変わらず二人に翻弄されながら。

それでも楽しい日々でした。

夏休みも近づいたある日、壁新聞を作る事になりました。そのころの日記です。

『かべしんぶん』 7月10日 夏！

もうすぐ夏休みです。今日も暑いー！

夏休みの宿題で、かべしんぶんを作ることになりました。班ごとに分担を決めて、1年前の災害をテーマに記事にして、休み明けの式典の日に発表します。

キャプテンはサクラ祭りを記事にしたいと言いましたが、全会一致で否決されました。裁判長が「関係ないし、きんだんのれきしだから」といっしゅうしました。

結局、私の班は半年前に騒ぎになった「空飛ぶ飛行船」を記事にすることになりました。他

に案も出なかったけど、キャプテンはともかく裁判長まで乗り気なのが、スゴク気になる。この二人が組むと良くないことが起きそう。

『記事のメモ』 9月3日 まだまだ暑い

今日はかべしんぶんの日。

休みの間、各自が作った資料を元に、記事に仕上げていきます。

例によって私が文章のまとめ役。冒頭はこんな感じかな。

「リムサを守った謎の空賊船に迫る！」

まだ記憶に新しい先の大災厄では、エオルゼア諸国に著しい被害が出た。特にリムサの被害は甚大であったが、辛くもミズンマストの防衛に成功し、壊滅の危機を免れている。我々取材班が独自につかんだ情報によると、この防衛戦に関し、謎の空中戦艦が関与したらしい。当時の証言記録を元に、その時何が起こったのかを検証する！

……あとは以前の裁判記録を使ったり、キャプテンのイメージイラストが満載だったり、裁判長の冷静な総括が入ったり。最初は不謹慎かなと思ったけど、出来上がってみると結構楽し

い記事になったかな？と思ってます。頑張ろう記事ばかりより、良いよね。

式典は9月5日です。出来上がったしんぶんは明日の夕方、式場の一角に張り出す事になっています。

翌日、9月4日の日記はとりとめのない内容でした。でも翌日、式典の日に事件が起こります。この事件のショックで、私は一か月近く日記を書けなくなりました。

A. E. 1568年9月5日。

災害からちょうど1年。慰霊式典の朝。

会場の一角が騒然としていました。

「なに、これ……」

嘩然とする私たちの班。式典に合わせて作成していた壁新聞のうち、私たちの班の新聞だけが破られ、奪われていたのです。

「なによこれ！誰がやったのよ！私の活躍どーしてくれんのよ！」

「活躍はしてなかったと思うよ。」

これだけは言っとかないと。

「これは意図的なものだな。」

と裁判長。

「……え？どういうこと？」

と私が聞き返すと、

「単なる嫌がらせなら、僕たちの記事だけを狙い撃ちにはしない。それに、破っただけじゃなくて、記事を持ち去ってる。これは推測だけど、犯人は、僕たちの記事を公開されなくなつたんじゃないかな？」

「理由なんてどうでもいいわよ！犯人見つけてとつちめてやらないと！」

「まって、壁が光ってる……？」

新聞を張っていた壁が、わずかに光っているように見えました。

「光ってなんかいいわよ？」

「まて、安易に触るんじゃないっ」

制止は届かず、反射的に伸ばした手が、燐光に触れたとき。あたりは急に暗くなり、わずかに朝焼けが光る夜のとばりに支配されました。そこに立つのは、私一人。

……じゃなくて、すぐ後ろに誰かいる！

「良い記事だね。だけど、この記録は表に出しちゃダメなんだ。」

振り向いた私に無造作に伸びる手。私は壁に張り付いたまま逃げ場を失い。捕まる！
そう思った瞬間、手が私の体をすり抜け、そのまま新聞に届きました。

ビリビリビリっ！

紙が引き裂かれる音が背後に響く。

「……おい、どうした？何を呆けてる？」

「なにー、私の顔になんかついてる？そんなに見つめちゃはずかしー♪」

瞬きの間に、視線の先は二人の友達に変わっていました。

「女の人。暗くて近すぎて一瞬でそれ以上はよく分からなかった。新聞、やぶった。」

そこまで一気に吐き出して、壁を背にしてへたり込む。こ、こわかった……。

「何を見ました？」（……まさか『過去視』ですか？）

裁判長は、途中から小声になって、耳元にささやく。

「？かこ s むぐ g k え l w l @ p w !」

おうむ返しをしかけた私の口を強引にふさいで、広場の隅に拉致された。

「ばっ！声を出さない！」

「んーーーーむーーーーー!!」

「そろそろ離してやらないと死ぬわよ?」

「あ、これは失礼。で、何を見たんです?」

「…お花畑が見えた…ケホッ」

「その前。壁に手を伸ばした後。」

どう言えば。

信じられるのか、信じてもらえるのか。

「さっきの、『過去視』って何のことさ?」

キャプテンが割って入ります。

裁判長は露骨に嫌な顔をしてキャプテンから目をそらしました。

「なぜさっきのが聞こえてるんだ…。とんだ地獄耳ですね。」

「全部聞いて全部見て全部覚えるのが学年トップの秘訣よ!」

「体育会系地球外生物ですか、あなたは。」

「うっさい(バコッ)」手が出る。頭を押さえながらも裁判長は、

「その話は後で。そのまま『見たまま』で結構です。何を見ましたか?」

そこまで言われて、やっと話す気になった私。

世界が暗転したこと、真後ろに人が立っていたこと、手がすり抜けたこと。

一連の出来事を説明しました。

「すごいですね。冒険者以外で過去視ができる方を初めて見まし（バコッ）」

「せ・つ・め・い！ 過・去・視・と・は・な・に・か？」

笑顔がまぶしいキャプテンと、涙目で頭を抱える裁判長。

「……さっき見えたのは過去の出来事ってこと？」

「ん、察しが良いね、その通り。書記長は、夜明け前の犯行現場を『過去視』で目撃したんでしよう。『過去を視る』能力。稀ですが、そのような能力者は存在します。」

「えー！ そんなこと出来るの！？ 私にもできるかな！」

「キャプテンは未来に生きてるから無理じゃないですか？（バコッ）」

「残念。なんでそんなこと知ってるの？ どっかで会ったの？」

繰り返す笑顔と涙目。しかし裁判長は毅然と切り返します。

「教えられません。」

「……あ、そ。」

「殴らないんですか？」

「私は無駄なこととはしない主義なの。」

「……」「……」

キャプテンはほんとにキャプテンになるかもしれません。
でも、そんなことより。

「えっと……、もう1回、『視て』こようか？」

「これまで過去視をしたことは？」

「はじめて」

「では、無理をしないほうがいいでしょう。新聞は残念ですが、記録が残っていれば何度だって作ることができますから。」

この時無理をしなかったことを後悔することになります。
だって、教室に戻ったら、私の日記帳が無かったんだ。

光を探して

『ちゃんと笑えてたかな』 10月7日 曇り

新しいノートに、新しい日記を始めます。

このノートは、班のみんながお金を出し合って買ってくれました。

紙はまだ品薄で、勉強用にやっと1冊支給される状態です。かなり無理をしたはず。

お姉ちゃんからもらった日記帳は、結局見つかりません。

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

あの日からそんな事しか考えられてなかったせいかな。たくさん言葉が出てきそうになったけど、どれも言葉にならなかった。

みんなには「ありがとう、日記付けるね」って、笑顔を返したつもり。

日記を付けたら、良いこと思いつくかも。

しばらく休んでたけど、このくらいは許してくれるよね。

大事な人から貰った、大事な日記帳でした。

本当にショックで、ずっとふさぎ込んで：：。

でも、私を心配してくれる友達が居て、頑張らなきゃって思っ

そうやって前を向けば、思いがけず良いアイデアが浮かぶんですよ！

凄いこと思いついたんです！

『凄いこと思いついた！』 10月23日 星空

私って天才かも！ひらめいちゃった！

日記帳は無くしちゃったけど、日記は過去視すればいいじゃん！

：：でも、狙って過去視する方法が分からない。

こないだは、光？に触れることができた時に『視れ』みたい。

だから後は「光」の探し方？感じ方？を見つければ何とかなりそうなんだけれど。

裁判長に聞いてみたら、過去視能力者はあの災害での戦いで全員行方知れず、そもそも狙って過去を見た人は知らないって。うーん、自分で開発するしかないのか、がんばろう。

『しこうさくご』 10月24日 雨

まずは最初の手掛かりと思って、初めて過去視出来た広場の壁を見に行きました。

天気は悪かったけど、暗いほうが光を見つけやすいかな？という期待は結局、手がかりも無く調べてるうちに容赦なく本降りになった雨に、止むなく中断を余儀なくされて。

なんだか寒気がする……。もう寝よ、おやすみなさい。

『うう、かぜひいた』 10月25日 あたまいたい

さむい。広場になんていかなきゃよかった。

今朝から熱が出たので、今日はずっと部屋に閉じこもっています。

昼下がりにキャプテンと裁判長がお見舞いに来てくれたけど、あの二人がそろってるとうるさくて……。突っ込む余裕がないときに頭痛の種を増やさないでください。

でも、「一人じゃないお守り」っていわれて、三人おそろいのLSを貰いました。

今は使えないけど、エーテライトが復活すればちゃんと会話もできる本物です。

そういえば、お姉ちゃんからもLSを貰ったんだった。

今日は2つのLSをお守りにして寝よう。良い夢見れたらいいな。

『ユメ』 10月26日 ふわふわ

まだ熱は下がないけど、頭痛が消えたのでだいぶ楽。

でも、ふわふわしてる。そのせいか、面白い夢を見ました。

二人がLSシヨップで、お見舞い品をあげじゃない、こーじゃないって相談してる夢。

「あら、このピンク球、かわいいじゃない!」

「シヨッキングピンクがチャームポイントですか?海賊志望なら黒じゃないですか?それは安っぽく感じますが。」

「あら、私が提督になったあかつきには、マザーシップはピンクで固めるわよ?」

「リムサの未来は相当シヨッキングになりそうだ(バキッ)」

「おじさん!これ3つお揃いで頂戴!」

「お金出す、僕の意見は無視ですか…。」

目が覚めたとき、いつの間にか手に握りしめていたピンクの球は、ほんのり輝いているように見えました。

明日は学校、行けるといいな。

無理をするものじゃないです。

過去視で解決できるって閃いたのは良いんですが、具体的な策が無のまま、雨の中を当てもなく手掛かりを探した私。結局、完全に風邪を引いて寝込んでしまいました。

幸い、二日ほどで回復し、翌日学校に向かいます。そこで「光」を見つけたんです！

『光が見えた！』 10月27日 バンザイ！

わかった、わかったよ！過去視の光はリンクパールに宿るんだ！

昨日の夢を二人に話したら裁判長が、

「それ、過去視じゃないですか？まったく同じ会話をしたはずですよ。」

「ぶん殴るタイミングまで完璧ね！」

「そこは余計です。」

「何か触媒になるようなものがあるんでしょうか……。」

ポケットに手をつ突っ込み、取り出したかと思うと、何かを指で真上にはじいたキャプテン。きらりと光ったそれはショッキングピンクの球。

「これじゃない？」

「ああ、その可能性は大きいですね。」

裁判長がもう一つを取り出し、机には2つのパールが並びました。

「何か見える？」

最初は気が付かなかったけど、目をつぶって、やっと『光』を見つけました。

パールの真上、「ちょうど私の目線と同じ高さ」に、2つの光が浮かんでる。

恐る恐る触ってみると、夢の出来事が、まったく同じように目の前で再生されました。

これだ！すごいすごい！

「じゃあ……」

今度はお姉ちゃんのパールを机に取り出します。

『光』は、さっきと違って、目線の高さから始まって、点々と沈み込むように下に向かって並んでいます。一番『下』の光は、地面の下に潜り込んで光っていました。

「うーん、これ、下の方はどうやって『掴む』んだろ……」

「こら（パコッ）」

一人で盛り上がってる私。

キャプテンに頭を小突かれて我に返った後は、下に伸びる『光点』の存在を何とか説明し、そこから後は検討会でした。

まだ分からないことも多いし、明日は細かいメモを取る予定。

興奮してて目が冴えてるけど、明日も頑張らなくちゃ。

そうそう、「お姉ちゃん」についてお話していませんでしたね。

私に冒険日記とリンクパールをプレゼントしてくれた人なんですよ！冒険者やってて、私が森の都に来た頃からよく世話をしてくれました。その頃の話はまた今度に。

この日からしばらく、「過去視の光」について、調査する日々です。

といっても、やっぱり私は脇役扱いで。

そのうえ視えるのは私だけなので、二人の好奇心に全力で振り回されていました。

それでも、二人の後ろを必死についていくこと、私は楽しかったんだろなあ。後から振り返れば、この頃から既に、私がかかなり無理をし続けている事に気が付きます。

それはそれとして、光球とは何か！頑張って調べてますよ！

『光球メモ』 10月28日 難しい

リンクパールに宿る『光球』についてのメモです。

といっても全力で突っ走るキャプテンと裁判長の話は難しい。
理解できてるかどうか、かなり不安。

【光球の性質】

エルにしか見えない光。触ると「過去視」が出来る。

一度触った「光球」は消えてしまう。そのうち復活するのかどうかは不明。
過去を記憶した何か、と考えられる。

【光球の位置】

リンクパールと同じ水平位置に、「エルの目線」の高さを基準に浮かぶ。

リンクパールを上においても下においても、光球の高さは動かない。

エル自身が動くと、目線の高さに合わせて高さが変わる。

【高さの関係】

推測だが、過去の記憶ほど「下」にある？前日程度だとほぼ目線の位置。

目線より上には存在せず、未来視はできない模様。

【光球とは何か？】

今のところ不明。リンクパール以外にも宿るのか？

リンクパールの材質に関係するのは継続調査。

【最初に広場で過去視が出来た原因は？】

恐らく壁際、足もとに被疑者のリンクパールが落ちていたと推測。

後日の調査で光が無かったのは、すでに回収されていたため？

お姉ちゃんのリンクパール、かなり下の方まで光が潜ってるんだけど、手が届かない。

そもそも目線が基準だからどうにもならない。

限界があるってことかなあ？

『潜る』 11月14日 晴れ

昨日、幻術ギルドの社会見学がありました。霊災の時の避難場所だった旧本拠地は神木が倒されたために閉鎖され、今は新しい神木の根本に本拠を移しています。

で、部屋に戻った後に幻術士さんの瞑想を真似してみたら、思いがけずうまくいった！

あの姿勢って意味があるんだねえ。

リンクパールに意識を集中して瞑想すると、自分の体から離れて、下に潜ることが出来ました。

そのまま光球をたどり、一番下に光る点。

触れると、冒険者のお姉ちゃんがいました。

どこかの都会の、LSショップの一角。キヨロキヨロと見渡す視線が、最後に私と出会って、ニコニコしながら手が近づいてきて……。

懐かしさでひとしきり泣いた後、「もうこの光景は見れないんだ。」と思って急に怖くなった。お姉ちゃんとは、あと何回も会えないかもしれない。

……これが昨晚のこと。

いつの間にか寝ちゃってて日記も書いてなかった。

今朝も遅刻しちゃうし、はずかしいい。

『二人の意見』 11月16日 曇り

光球が消えてしまう不安を二人に相談しました。

結論は、「しばらく潜る練習だけにしておきましょう。光球には触れずに、特徴の観察記録

に徹してください。」とのこと。

記録を残すのはもうクセになつてる感じだから、後は潜る練習かな。

「ウルダハから機材を取り寄せてる所だから、しばらく待っててくれないかな」

とは裁判長の弁。こないだから二人はまた難しい話をしてるようです。

なんだか嫌な予感しかしないんだけど……。

嫌な予感的中。翌月、とんでもないものを私は押し付けられます。

勘弁してよお！

断章 目指せ！時の測量士？

A. E. 1568年12月2日

かつて、偉大な測量士が、広大なエオルゼア全土をその足と測量機ひとつで測定し、現在の地図の原型を作った。太古の文明は空を支配して、世界すべてを測量したとも言われている。

そして今、新たな「眼」を得たことで、僕たちは時を測る手段を得ようとしているんだ！

……ということを熱く語ったら女子二人にかなり引かれた。

少し僕らしさを外したらしいので自重しよう。

「まあ、男子がロマンを語るのは悪くないけど。これが三角測量機？」

「そうだね、これは建設とかで普通に使うもの。」

「……ねえ、これ、高かったりしない？」

「大したことないよ、ちよこば2匹と、セットのキャリッジを合わせて1台買えるくらい。」

「っひ！？」

おっかなびつくり手を伸ばそうとした書記長が驚いて手を引っ込める。

「お金なら大丈夫。以前お小遣いで買ってたゴールドバザーの土地が建築ラッシュでかなり高

騰してさ、もう売り抜けてるから（バコッ）」

「とりあえず一般庶民を代表して殴つとかなないと、と思った」

「……」

たとえば女子が横暴だったとしても、男子はジェントルマンたるべき。祖父の教えは僕の誇りだ。けっして反撃したら10倍返しの結果が見えているから諦めているわけではない。

「まずは、普通の使い方から覚えていこう。」

設置方法・水平の取り方・スコープの合わせ方・角度の測り方……。

距離の算出については後で勉強するとして、まずは使い方一式を叩き込む。

流石にキャプテンは異常に呑み込みが早かったが、書記長の方は怖さもあるのか、一通りの要領を得るのに数刻を要した。

書記長が使えないと意味が無いので、二人でのんびり教える。

「そう、そこに見える十字を、あっちの基準に合わせて。」

「こ、こう？」

「今日、季節外れの陽気でよかったわねー。あー、ポカポカする……」

「あれ？うまく合わないよ？どこか間違ってる？フラフラして……」

「おいそこ！居眠りするなよ！」

「あー、きもちさー……」



キャプテンはのんびりし過ぎだった。ともかくここからが本番。

「さあ、問題は『過去視の光』がスコープから観測できるかどうかなんだけど。どう？」
数分格闘していた書記長の回答はN.O.だ。

「それで？対策はあるんでしょ？」

「スコープから見えるのは通常の光だけだからね。だから、こんなのも用意した。」

見た目はリンクパール。受け取ったキャプテンは、少し手の上で転がした後、

「魔法系の何か？」と問いながら、書記長に手渡した。

「うん。魔術的な交感関係を、光で可視化する魔法が封印されている。」

利用者と、利用者が交感できる魔術的存在との間に結ばれた糸を、視認できる光に変換する魔法装置。表向きは地震などで生き埋めになった人を、リンクパールなどを手掛かりに迅速に探す道具だ。

ウルダハの王族貴族の屋敷に、魔術的盗聴道具などが仕組まれていないかを探す技術が元になっていることは、裏事情に多少通じるものならだれでも知っている。

「『潜』ことが出来るなら簡単に使えるはず。これを手に持って、瞑想してみて。」

「ちなみに、このパールのお値段は？」

「キャプテンの見解として助言すれば、聞かない方が幸せじゃ無いかと予想する。」

「うう……。」

お金なんて稼げば良いだけだと思っただけだなあ。グリダニアはよっぽどお金に縁が無い土地なんだろうか？必要以上にビビってる書記長がやつのことで集中に入るまでの間、取り留めなく考えた。

さて。

『潜れた』ようだね。手に「パール」が残ったままなのはわかる？この装置は、術者が手に持つ実体の宝石と、魔法的な霊体に分離するんだ。パールを持って『過去視の光』まで向かって。」

手から宝石の光が漏れて伸びている。

光の先に書記長の意識があるんだと思うと、ちょっと不思議な感覚だ。

光の先っぽが頼りなく揺れて、そして地面に落ちて消えていった。光の線が結構な角度になったところ、動きが止まる。

「持っていったら、手に持った『パール』を、『過去視の光』に触れない程度に、なるべく近くに持って行って、そしてパールから手を放して戻ってきて。」

わずかに線が揺れ、しばらくのちに書記長が目を開く。

光を放つ手元のパールに驚いたが、やがて疑問の表情が浮かんだ。

「あれ？このパール浮いてる？」

「魔法の効果は10分程度。切れるまでは浮いてるから、その間に光の角度を測って。」

「切れたら落ちるって事よね、よし、測定は書記長に任せた。」

深さを測るために、都合2回の測定が終了。魔力消費は微々たるものらしく、慣れた人なら半日で100回近くの測定をしても平気だと聞いていた。

でも、どう見ても全霊使い果たした書記長がいる。

「疲れないって聞いたんだけど、もしかして潜るのが疲れるのか？」

「高価な機材で10分以内に測定するのが、緊張感ありすぎて、つらい。」

「そこは慣れよ！これで貴方は時の測量士ね！」

「実感ないなあ……。」

この後、暗算で深さを計算しきった体育会系地球外生物に関する話題は割愛する。

計測に慣れてもらうため、機材一式は書記長に預けた。本人はかなり嫌がってたが、見えるのも本人だし、慣れてもらうしかない。それで今日は解散だ。

自室に戻った彼は、机の引き出しから小箱を取り出し、取り出したパールに語りかける。

「いつか彼女を、貴方に紹介できる日が来るかもしれないね。」

パールの地の底で、光がきらめいたような気がした。

エルの日記

これ、全部でいくらの子？ちよつと考えたくありませんけど。とんでもない機材を押し付けられた私は、それでもどこか嬉しくて、期待に応えたくて、無理を重ねました。

それが、とても危険な一線を越え続ける行為だったこと。
私はそのことに最後まで気が付きません。

『さてどうしよう』 12月2日 ポカポカ陽気

今日は疲れました。

私はまだ9歳と11か月なのです。

あの二人と一緒に居ると要求水準が跳ね上がりすぎるのです。りふじんなろうどうきじゅんに訴えるべきだ、と大人の人が叫んでいたのを思い出したのです。

それにしてもこの測量装置……。誕生日プレゼント？の前払いなのかなあ。どちらかという
と巨大な借金背負わされた感じしかないんだけど。触って慣れるように、と言われたけど、
今日はもう見たくありません。おやすみなさい。

『黙々と調べる』 12月3日 くもり

昨日は日記を付けた後、やっぱり気になって測定しました。

結構遅くなっちゃって。今日も眠いけど、せっかく用意してもらった機材だし、ちゃんと調べないと。あーやつぱり、これは借金だ。早く返済しないとまともに寝れそうにないや。

でも、結構慣れてきました。最後の方は1測定5分切ってたし。角度の測定の後には深さを計算しないとだめだけど、私には計算方法がよく分かりません。

さんかくかんすう？これはキャプテンに丸投げしちゃう方がいいか。

『初めての日記』 12月7日 くもり

やっと見つけた！なつかしいなー、お姉ちゃんからノートを貰った日の日記。

うわー、字、へただなー。

内容幼いなー。

恥ずかしいなー。

とりあえずこれで何とかなりそう。測定はしばらくお休み。

今日から、昔の日記を写す作業です。

最初の日記を書いた日のこと。

過去視なんかなくなつて、昨日の出来事のように思い出せます。

私は、各地に冒険者が表れたのと同じところに、森の都に迷い込んだそうです。

だから、冒険者さんたちと私は、もしかしたら同じ世界からこのエオルゼアに迷い込んだのかもしれない。

ただ、当時7歳だった私は流石に冒険家業を始めるわけにはいかず、木工ギルドの孤児院に引き取られました。でも私、最初のころ全然喋らなかつたんですね。

モーグリさん達と同じ「心の声」。

私には心を直接伝える事が出来る、不思議な力がありました。

(…)

「ん？また冒険談を聞かせてほしいの？」

ただ、心的心声を聞くことが出来るのは同じようにエオルゼアに迷い込んだ冒険者さん達だけ。私は孤児院の子供達や先生と打ち解けることが出来ず、時折訪れる冒険者さん達に冒険談をせびる日々でした。

そんな冒険者さんの中に、特に私に気をかけてくれるラファエルのお姉ちゃんが居ました。

私は彼女を見かけるたび、くっついて回っていました。

「うーん、そろそろちゃんと『喋る』事に慣れていかないと、みんなと遊べないよ?」

(…)

「私たちと遊べるから良いって? そーしてあげたいのは山々だけど、私も他の冒険者さんたちも、ずっとここに居られないし。ああ、そうだそうだ、良いモノ、持ってきたの。」

(…?)

私は小首を傾げます。瞬間、なんだかおぞましいオーラが…。

(エルちゃん、お姫様みたいで可愛いのよねえ! あああっお持ち帰りしたい! ぎゅーっと抱きしめて、お風呂で髪の毛をきれいに洗ってあげて、それからそれから!)

心の声は、隠すことはできません。余りの情動に、私は逃げるように距離を取ります。

(…っ)

「…あら? 怖くないよー。」

反省したようなのでまた近づきます。…あれ? 何か持つてる?

「じゃじゃーん! 今日はエルちゃんに『冒険日記』と『魔法の玉』をプレゼントです!」

(…!)

目の前に広げられたノートを、私はキラキラした目で覗き込みました。そして、

(これなに! ぼうけん!? かくもの? こっちはなに? キラキラしてる! 光ってるの? きれーだね! でも何だろうこれ? あ、でも書けるかな? 本を読んだことはあるよ! だけど文字なんてち

やんと書いたことなんて無いよ！にっきって何を書くの？どうしよう！どうしよう！

当社比5倍の大音量心の声の速射砲。

これ、聞く方は結構ダメージがあるらしく、お姉ちゃんしばらくフラフラしてました。

「わ、わ、わ、待って待って、落ち着いて。」

(！?……)

私はほおおおお、という目になって。やっと落ち着きました。魔法の玉の方は、後で先生に使い方を聴けば良いらしいです。

：：：どうやって？先生には心の声は聞こえません。

ちよつと困った顔をお姉ちゃんに向けても、お姉ちゃんはニコニコするばかり。

そして、日記帳が広げられ、お姉ちゃんから筆記用具を受け取りました。初めての日記は、こんな文面でした。ダラガブの災厄があった年の初夏。私は8歳になっていました。

ぼうけんしゃのおねえさんが、ノートをくれました。

うれしいです。

にっきをつけたいとおもいます。

「そう、そう書くの……、出来たね！」

(…)

お姉ちゃんの笑顔。

私はブンブンと顔を上下に振る。嬉しくなってニパーッと笑う。

「お、なんだ書けるじゃんお前。」

「何してるのー？」

そこに木工ギルドの悪ガキ乱入。私はビククリ仰天、口をパクパクさせます。

「冒険に連れて行ってほしいんだって、エルちゃん。」

(…！お姉ちゃん何言ってるの！私そんな事言っていないよ！冒険なんて！冒険なんて！え、でもにつきに冒険を書くの？冒険って何をすればいいの？私にもできるの？連れてってくれるの？お願いしたらいいの？どうしよう？どうしよう！何をすればいいの？教えてお姉ちゃん！)

再び心の速射砲。

再びフラフラお姉ちゃん。

でも私の目をじっと見つめ、

(一緒に連れて行って、って、言葉で伝えれば、いいよ)

そう、心で伝えてきました。

どうしよう。…ごくん。

喋れないわけではありません。私は覚悟を決めて、思いつきり息を吸い込んで……

「っえほ、げほっつ！」

むせこみました。お姉ちゃん笑ったな！睨みつけるとごめんごめん、って目。

仕切り直し。落ち着け、落ち着け……。

「あ……つれ、て、行つて？ぼう……けん！」

やっと言つた言葉に、悪ガキたちは目を合わせた後、

「おう、来いよ！……でもお前、字、きたねーなー（笑）」

遠慮なく暴言を返してくる。そしてお姉ちゃん。

「あはははは！」

（なによ！しかたないじゃない！これからきつとうまくなるんだから！）

お姉ちゃんには非難の心をぶつけておく。

「あはは、ふうー。……さあ、冒険に行つておいで。みんな、一緒に遊んであげてね。」

そうだ、冒険、冒険！私は悪ガキたちにくっついて、置いてかれないように駆け出す。

「エルちゃん、日記楽しみにしてるからね！」

振り返る。

お姉ちゃんは片手を腰に当て、もう一方の手をぶんぶん振ってた。

私もぶんぶん振って答えました。

一通りのやり取りの後、お姉ちゃんは空を見上げました。空？私も見上げたけど、森を見上げてても森ばかり。私は悪ガキたちが呼ぶ声に、再び慌てて駆け出しました。

これが、冒険者のお姉ちゃんを見た最後の記憶です。結局私は、お姉ちゃんに自分の日記を一度も見せることが出来ていません。

『(タイトル無し)』

おとこのこに　じがきたないってわられました。じぶんだってきたないくせに。
くやしいのでかきとりががんばります。

(以下、書き取り沢山。略)

『だい6星れき1567年』

ぼうけんしゃのお姉さんに日記のことを聞きました。

「タイトルと日付と天気を書くといいよ」って言われました。

今日は、6月21日。

てんきは、いつでもお空はもりです。タイトルはおもいつかないの。

「じゃあ、タイトルは星れきにしてみました」

えっと1567年。学校で習いました。だい6星れきです。

かつこいい書き方だと、A・E・15676／21です。

でも、だい6ってことは1から5もあるんだよね？お姉さんは「よくわからないわー」って
言ってたけど。今度先生に聞いてみよう。

『リンクパールでおはなし』 8月7日 くもり

お姉さんがくれた きれいなまるい石があります。

耳に当てると お姉さんのこえがきこえます。

お友だちのきねんに、プレゼントです。

ずっとしゃべってたら怒られました。お出かけするんだって。おしゃべりするかわりに、こ
んど、日記でぼうけんじまんするの。ぜったい、かつんだから。

『どうくつぼうけん』 9月3日 くもり時々かみなり

ついに行ってきました。どうくつぼうけんです。

先生をリーダーに、わたしたちのぼうけんたいは、幻術に守られたどうくつをつきすすみ、ついに、あたまたつのはやした悪の大王をたいじしたのです。

LSでお姉さんにここまで話して怒られた。

「ひなんくんれんでしょ？真面目にやんなきゃだめよー」

冗談が通じない大人です。

お姉さんは、赤い月に戦いを挑む冒険中らしいですが、日記のネタバレだからってこれ以上教えてくれませんでした。

ヒントはお空にあるそうですが、空は森だよね？

「ふう……」

過去視を何度か繰り返すうち、何だか目が冴えてきて全然眠れなくなっていました。

ベットに潜り込んでも、ちゃんと寝れないので疲れが取れない感じがして。

「頑張らなくちゃ。みんなが手伝ってくれたんだから。」

そのまま私は、知らず知らず危ない橋を渡り続けます。

十日近くの間過去視を繰り返し、ついに、霊災の日にたどり着きました。

靈災の日

大人たちが騒いでいます。

「急げ！星が墜ちるぞ！」

「子供たちはそろってる！？」

「XXXXXが燃えてる！あっちはダメだ！」

そんな中、私は。

「えっとー、ずきんと、ぼうけんにつきと、おかしと、りんくしえるとー……。」

リュックサックに荷物を詰め込みながら。こないだから何度か繰り返してる遠足の続き。私は、「今日も楽しい冒険だ！」程度にしか思ってませんでした。

後に「第7霊災」と呼ばれる、ダラガブの騒乱から始まる一連の広域災害。予兆は数か月前から次第に強くなり、森の誰でも何度か避難訓練が実施されていました。

ですが、当時の私はまだ8歳。

幻術ギルドへの避難訓練も、あこがれの冒険の一つに過ぎず。

今日は「本番」だと言われても、

「本番だったらもつと楽しいの？」

その程度でした。子供ですから。

そんな感じの避難の道中、ふと、不思議な「声」に気が付きました。

（たすけ……け……ぽ……）

「？せんせー？」

「なに？エルちゃん。」

「声が聞こえるよ？たすけて、って」

「え？」

先生は一瞬青ざめ、あたりを見渡します。あまりに真剣な表情にちよつとギョツとしましたが、また声に気が付いて、そちらに目を向けました。

「あっち……かな……？」

「先生には聞こえないわねえ……。気のせいってことは無い？」

「だって、何度も繰り返して……」

（助けてクポーーー！）

瞬間、私は駆け出していました。一瞬のうちに先生を振り切り、冒険とは言えない無謀な領域へと足を踏み入れてしまったのです。

「ポンポンが挟まって抜けないクポーーーー!!」

そこにいたのはモーグリさん。

ちなみにモーグリさんは心の声で喋ります。私にとってはどちらでもあまり変わらないけど、普通は聴こえないそうです。この日のモーグリさんの声は、全部心の声でした。

見ると確かに、頭とポンポンを繋ぐところが挟まっています。

倒れた木の枝に引っかかったようです。多分つなぎ目が挟まるより、頭かポンポンが挟まってスプラッタになる可能性の方がよっぽど高かったと思います。

さて、私ったら、こんなこともあろうかとリュックの中に良い道具を入れています。

「ハサミあるよ?」

「駄目クポ!」

即答です。

モーグリのアイデンティティだとか、切ったら災いが解き放たれるとか、色々言われましたが、とにかく切らずに抜け出したいという涙ぐましい思いは伝わってきました。

仕方ないので動かせないか探ってみます。

「いた、いた、ひっばるのは駄目クポ!」



※イメージ映像です

この枝、全然動かないわけじゃないけど、とにかく先っぽのポンポンが邪魔でした。
切っちゃいたい。

「駄目クポ！」

駄目出しの多いモーグリさんです。

枝はよく見ると、挟まってる所から結構長く伸びてました。

ふと、木工ギルドに置いてあったシーソーを思い出します。

先っぽの方に乗れば先生に勝てました。……やっちゃいましょう。

「何するクポ？」

「引っ張って！」

助走して、渾身の力で、ジャンプして枝の先に飛び乗る！

「えーい！」

そしてやりすぎました。世界が回りました。森の恵み拔群にしまった枝は私を大空へといざない、そのまま向かい側の茂みに突っ込む羽目に。

目を回してた私の前に、

「抜けたクポ！大丈夫クポー？」

「あ、……あはははは！」

なんか楽しくなっちゃって。

「クポ？クポ？」と飛び回るモーグリさんを無視して笑い転げてました。

結局、まだ分かっていませんでした。

ひゅるるるううう……、ドーン！

さつきまで悪戦苦闘していた木々が丸ごと吹き飛び、怒り狂う炎となります。

目前に落ちた隕石によって、私たちは退路を失いました。この時リュックを無くさなかったことは、今考えると殆ど奇跡だと思います。

「こっちクポ！急ぐクポ！走るクポ！」

四方の殆どが炎。森が怒ってる。こわい、こわい！私はもう、声も出せず、走ってる。心の声で会話ができる事も幸運だったでしょう。無駄な呼吸で煙に巻かれることもなく、ギリギリのところまで炎の回廊を抜けていました。

「中に入るクポー！」

中？薄暗い闇がその先にある。そんなに深くはありませんが、洞窟のようでした。

「ここ、大丈夫なの？」

「森がここなら大丈夫って言ってるクポ！」

「森？」

「森は森クポ。」

話がかみ合ってません。とにかく奥に入って、縮こまってました。

洞窟の出口は赤黒い渦。少しジリジリとした熱気が、これ以上中に入ってこないことを祈るしかありません。たまに大きな「ドーン！」という音と地響き。

もう何もできることが無い事が、怖さをどんどん強くしていく。

こわいよ、こわいよ……。

何も出来ない？

私は、ぐずりながら、リュックから筆記用具と日記帳を取り出しました。

何でも良いから何かしたかったです。

「何してるクボ？」

モーグリさんが不思議そうにぐるぐる回ってる。

「日記……書く、ひっ……うわあ……こわ、こわいよ……」

こわい　こわい　たすけて

そこまで書いて、

「うわ、うわあああん、こわいよおー、おねえちゃん、たすけてー！」
と泣き出して、そして泣いたことで日記帳が汚れたことにまた、

「あああ、よごれちゃ、た、あああ、うわーん」

とまた泣いて。

「クポ！だ、大丈夫クポ！この位なら乾かせば良いクポ！」

慌てて日記帳を私から少し離して、口でフーフー息を吹き付けて乾かそうとしています。良いモーグリさんでした。

「……ヒック……あ、……ありがと。」

「これは、何クポ？」

意表を突かれ、私はきよとんとします。

日記帳を知らないの？……ああそうか、モーグリさんは喋る言葉を知らないんだ。

以前の私を思い出しました。

「これはね、日記帳。心をここに残せるの。」

「心が残るクポ？」

「うん。みんなが心の声じゃなくて言葉を使うのはね、文字に書いたら、ずっと残るからなんだよ。」

「ずっと残るクポ？」

「ずっと残るの。」

そうクポかー。とモーグリさんは妙に感心顔。ちょっと得意げになった私。

「こうやって残した心をね、遠くの街に送ることもできるんだよ。」

「そんな魔法みたいなことが出来るクポ!?」

「手紙、って言うの。遠くの人に心を届ける仕事もあるんだよ。手紙屋さんって言うの。心と心をつなげるお仕事なの。」

「心を伝えあう仕事クポ：、なんだかすごいクポ！僕も人間の言葉を覚えるクポ！」

外の大変な状況を一時忘れていました。

しかし次の瞬間、これまでとは比べ物にならない強い揺れが大地に響きます。

ズンツツ！

何か重いものが刺さったかのような鋭く、深い揺れ。

「キヤー！！」

「クポーっ！」

二人抱き合います。

外から聞こえる、何かが爆ぜるような音が更に大きくなり、たまに大きく光ります。洞窟の天井から小石がポロポロ落ち、気が気ではありません。

「も、森が言ってるクポ！祈るクポ！」

「森？森って何？なにに祈るの？」

「森は森クポ！あっちクポ！」

あっちって言っても、その先は壁……。そのはずです。手の感触は確かに壁です。でも、壁のずっと先に、光が見えました。

青白い何かが、次第に何かを包み込もうとしていました。

「祈るクポ！応援するクポ！」

「応援？」

何をすれば良いかもよく分からず、（がんばれ！がんばれ！）と、ただ思っていました。

結局、青白い何かは大きく弾けました。直後から始まった大きな揺れと音、そこから先はよく覚えていませんが、とにかく二人で怖い思いをしていました。

おびえ疲れて寝てしまってから数時間後。先生が私たちを発見しました。モーグリさんと私は、二人で抱き合っていたそうです。

過去視が終わった瞬間、強い眩暈におそわれ、ベッドに一時倒れ込みました。

「あ……れ……？」

眠い。なに、これ。

さつきまで全然眠れないくらい目が冴えてたのに。

「……片づけなきゃ。」

我慢できないほどでは無かったので、日記帳を片づけます。「こわい　こわい　たすけて」
の文字に苦笑。

これ、知らない人が見たらびっくりするだろうなあ。過去視中に同じように文字を書くと、
驚くくらい、そっくりの筆跡で書けるのです。

再び眩暈。

疲れが出たんだろうな。今日はゆっくり寝よう。

そう考え、私はベッドに潜り込みました。

眠りに落ちる直前、私はある事を思い出します。

（そういえば、あの後、なにか……素敵なことがあった気が……、日記に、たし……か……）

先生と帰るときに目を覚ました私。その時見た光景を、日記に記しました。

記憶で思い出したのか、それとも自らを過去視したのか。

眠りに落ちる寸前、確かにそのページが私の前で開きました。

『ひかりのはしら』 9月6日 ☆☆☆

先生が見つけてくれて、外に出ました。

びっくりした。

星って、こんなにキラキラしてたんだ。

モリのない空なんて初めて。

おうちもなくなっちゃったけど。

泣いてるひともいたけど。

きれい。たのしいかも。

それと北のむこうに、ひかりのはしら。すごいね。

先生に聞いたら、しらなかったよ。

あんなに高いのに。めをとじてもみえるよ。

過去視の代償

失敗した。大失態だ。何が「未来のキャプテン」だ。

全部聞いて全部見て全部覚える。

そして船の羅針盤として正しい方角を見つけるのがキャプテンの役目。

なのに私は見逃した。普通じゃない行いをしたら、普通じゃない代償を払う必要がある。

そんな「当たり前」を、事が起こってから気が付くなんて。

始まりは静かだった。学校の朝、

「今日はエルさんはお休みです。」

「病気なんですか？」

「んー、熱とかは無いから心配はいらない、とは伺っています。」

それが二日前。結局、書記長は昨日も今日も休んだ。今日は彼女の誕生日。心配無いという言葉をうのみにして、私たちは彼女の誕生パーティーの準備を優先させていた。

そして今、静かに寝息を立てている彼女の前に立ち尽くしている。

「どうして……大したことないって言ってたじゃない！」

「ああ、見たとおり、普通に寝ているだけだ。熱があるわけでもない。若干やつれてる感じだったの、疲れが出たのかと休ませていたんだが……。ただ、起きない。」

「食事とかは大丈夫なんですか？」と裁判長。

「ああ。正確には寝ているというより、自我が極めて希薄、という感じでな。呼びかければ生返事をするし、枕元に食事があれば食べてるし、トイレには自分で行くんだ。だから気が付くのが遅れた。」

「自我が薄い……？あの、彼女、直前の様子で何か変わったことは？」
私が問う。

「17日の晩寝るまでは普通だったよ。晩御飯もいつもの時間に取ったし。ただ、最近結構夜遅くまで起きてる感じだったな。何かかったいな装置を取り出してゴソゴソしてたが。」

裁判長と顔を見合わせる。装置といえばあれしかない。

机のそばに置いてある計測装置一式を確認してみたけど、綺麗に片付いていた。計測中の事故なら、片づけることは不可能だ。裁判長は机の引き出しから日記帳を取り出していた。

「僕たちがプレゼントしたものです。やっぱり彼女、マメですねえ。機材を渡した当日から、『過去視の光』の測定結果を残しますね。」

後ろから覗き込む。

1番、2番、3番……、一番深い「光」から順に、色などの特徴が書き込まれてた。

一部のモノには更に「角度」と「計測日」が記載されてる。

計測日は「12／3」から始まり、「12／17」で終わっていた。

「ん？この×印はなにかしら？」

更に一部の項目に、「×」マークと日付が書き込まれている。

すべて、2年以上前の日付だ。

その一覧表からは他に情報らしいものは無かったので、ページを進めた。

そこからは普通の日記。日常の取り留めない出来事が並ぶ。

最近の日記まで読み進めて、唐突に違和感があるページが現れた。

「いきなり幼くなりましたね。これは古い日記ですか？しかし、彼女は日記帳を失ったはずで

すが……？」裁判長が呟く。

たどたどしい筆跡に大きな文字。

今の書記長からは想像できない、でも何かしら面影を感じる文章。

それは私たちが知らない、災害前の彼女そのものだ。

日記帳を貰ったこと、冒険者のお姉さんの事。数ページ読み進めて、私は気が付いた。

「書記長、よっぽどこの『日記』が大事だったのね。」

「過去視にこだわったのは、この日記を取り戻すため、ですか。」

式典の日に奪われた日記帳。彼女が持っていたリンクパールは、常に日記帳と共にあったのだろう。日記の再現をするために、彼女は過去視を繰り返したらしい。そして、最後のページに込められた『恐怖』に出会う。

こわい　こわい　たすけて

「……なんですか、これは。」

「ちよっと、一覧表のページに戻って。」

一覧表に記載された角度を見て、私は深さを記述していく。その作業を繰り返し、すべての深さを記述した後、×印とその横に書いている日付を見比べた。

そして一番浅い×印を探す。そこには過去の日付が書かれていない。

「A・E・1567年9月5日。この日記は、災害の日だ。」

「助けて……。」

唐突な声に驚き、二人はエルの顔を見る。

彼女の眼には涙が光っている。

「ねえ、今さらあの日に捕らわれちゃったの？……情けないわね！帰ってきなさい！」
数発ほったを引っぱたき、直後に思いがけず強い力で引きはがされた。

「落ち着け！」裁判長の声。

一瞬の涙が嘘のように、少し赤いほつたと、穏やかな寝顔が視界に入る。
力が抜ける。へたり込む。

「これはまた、今時珍しい病気だね。何があったんだい？」

扉が開く。突然現れた女性の声にも、私たちはしばらく無反応だった。

『夢の記憶』 ？ ？

一度も出会った事がないはずの人に、出会った記憶が残ってる。
私は立っていた。

「きれー……」

森が消えた、満天の星空。そして北の空に輝く光の柱。
とても高く、月に届くかのように。

「ねえ、おじいちゃん。あれはなーに？」

「あれはの、希望の光じゃよ。」

「どこまで伸びてるの？」

「それはな、XXXXXXXX……」

世界は曖昧で、おじいちゃんもいつの間にかいなくなつて。

……あれ、あの人だれ？わたしは、だ……れ……？

断章 時に愛されしもの

時は同じく、12月20日。

「本当に書記長……エルは大丈夫なの？」

「ああ、少し時間はかかるけど戻ってくるよ。」

鮮やかなステンドグラスに彩られた建屋の一角。

冒険宿「カーラインカフェ」のテーブルのひとつを、少し奇妙な三人組が占拠している。
キャプテンと裁判長、そしてこの冒険宿の主、ミューヌだ。

「貴方たちが噂の三人組か。」

「うわさ？」

「天才二人に振り回されてる可哀そうな女の子がいるって話。結構有名だぞ？」

「……」

言われた二人はかなり本気でへこんでるように見えた。

（ふむ、少し不謹慎だったか。）

状況が状況だけに、ジョークで場を和ませる戦略を取るべきではなかったらしい。

しかし別段気にした風もなく、彼女は話を続ける。

「結構難しい話になるんだけど、ちゃんと付いてくるように。」

「はい。」「もちろん。」

「まずあの子の症状だけど。あれは『アニマ欠乏症』による意識障害だ。」

「アニマ？」

「おっと、今の子はそこから説明する必要があるか……。」

ふむ、と間を取った後、話は続く。

「エーテライト、は知ってるかな。」

「都市間通信網の根幹を支える設備、だとは。去年の災害で壊れたままですよね。」

「えーと、リンクパールの通信や、テレポやデジコンのサポートをするんだっけ。」

「正解。じゃあ、テレポに使用制限があるのは知ってるかい？」

かぶりを振る二人。マスターは説明する。

- ・冒険者にはアニマが100与えられること。
- ・テレポを使用することに既定のアニマが消費されること。
- ・1日に一定数回復すること。
- ・アニマが0になったらテレポの使用が禁止されること。
- ・アニマの残数管理は冒険宿が配布するリンクパールで行っていること。

「あれ？なんで書記長の病気にアニマが関係するの？今テレボ使えないじゃん。」

「そうだね、不思議だ。だから詳しく事情を聞きたいんだ。」

二人は顔を見合わせる。そして裁判長。

「そもそも、アニマとはなんですか？冒険宿が配るクーポンみたいなもの？なら、使いすぎたからって病気になるのはおかしいじゃないですか。」

「お、話が早くて助かるね。良い質問だ、ここから本質の話に入るよ。」

「アニマとは、『光』を示す単語。自我を構成する個々の要素。『人』の心は、沢山の『アニマ』が集まった一つの塊だとされている。人だけじゃない、この星すべての命には、アニマが必要だ。」

いきなり話が飛躍する。このタイミングで疑問を挟まない二人に彼女は内心舌を巻くが、それはおくびにも出さない。

「花が好き、トマトが好き、オムライスが好き。この一つ一つの感情、思いが1つの『アニマ』。例えばキャプテン。」

「わたし？」

いきなりあだ名で呼ばれて、彼女は目を白黒させる。

「君の『好き』『嫌い』のアニマを全て調べて、まったく同じアニマの組み合わせで一つの

『心』を作ったら、それは君かい？」

「……心がアニマなのよね？まったく同じなら、同じじゃないの？」

「じゃあ、君の目の前に、『君と同じ心』が居たら、それは『君』？」

「え、私の前に『私』？心が同じなら私じゃないの？」

「いや、まったく同じから始まって、別れば別人じゃないか？」

「う？あー、何かおかしいわね！貴方、何か引っかけ混ぜてんじゃないの？」

「お、気が付いたか、これは早々に降参しておこう。」

「もー！こっちはマジなんだから横道逸れないですよ！」

「ごめんごめん、必要な横道なんだ、許してくれ。」

「うー……。」

「さて、もっと正確な話をしよう。」

ミューヌは懷から小錢を取り出す。

1ギル・5ギル・10ギル……。

10枚ほど取り出し、傍らにあったティーカップの皿に乗せた。

ティーカップの残りを一気に飲み干すと、彼女は話を続ける。

「この皿が僕の『心』だ。そして心の中に『アニマ』が詰まってる。」

硬貨を指でつつきながら、そう告げる。

「さあ、今度は裁判長。ちょっと君の皿を空けてくれないか。」

言われた裁判長はカップを手にとった。そのまま、少し飲もうかとカップを口に近づける。

「僕は君を愛している、この心を伝えたい。」

盛大に吹き出す。

「げほっ、な、なんですか、いきなっ！げほっ！」

半発言葉になってない。ミューヌは笑うと、硬貨を一枚摘み上げた。

「あはは、説明のための例だよ。さあ、僕は君に『心』を伝えるよ？」

そういつて、硬貨を裁判長の皿に落とした。

チリン〜ッッ。

硬貨はしばらく皿の上で回った後、最後に軽い音を立てて倒れた。音が室内に響く。

その様子をじっと見つめていた裁判長は、視線をそのままにぼつりとつぶやいた。

「……アニマは、『心』の要素ではなく、『心』を伝えるための媒体……手紙のようなもの、という事ですか？」

「そうだ！本当に話が早いね！うん。『心』の本体はアニマの方じゃなくて、この『お皿』だと思ってくれ。アニマは地脈から少しずつ供給される。そして、心の中に詰まっているアニマを外に放出することによって、心の中身が相手に伝わる。」

「心は、伝えるもの……。」

キャプテンは、手に取ったカップの液体をぐるぐる回しながら、一言。

ミューヌはうなずき、二人の視線が自分に集まるのを待った。

「話を戻そう。君たちの友人は、『アニマ欠乏』に陥った。結果、心を伝えることが困難になり、きわめて自我が薄く見える状態になっている。これがアニマ欠乏症の正体だ。」

「じゃあ、エルはちゃんと目覚めるの？」

「心が壊れたわけじゃないからね。適切な管理下に置いてアニマの回復を待てば、大丈夫、目覚めるよ。」

二人は「ふう〜〜〜っ」と聞こえるような溜息を付き、脱力した。

「ま、そういう事なのでとりあえず安心してくれたまえ。……ここからは事情聴取だ。何やらかした、君たち。隠し事は無いかい？」

再び硬直する二人。

結局隠し通せず、過去視の事を説明した。

「過去視とはすごいな。成程、彼女もまた『天才』だというわけか。」

楽しそうに話すミューヌを不安そうに見つめるキャプテンと裁判長。

「あの、このことは彼女のためにも内密に……。」

「ははっ、分ってるよ。もともと冒険者ギルドはそんな人間が集まるところだ。秘密の無い冒険者などいないさ。」

「はあ……。」

「しかしそうか、過去視が原因だとすると、少し調べる必要があるな。」

「え、すぐ目覚めるんじゃないの!？」

「彼女が使ってしまったアニマの消費量を推測しないと、目覚めの時期が予測できない。アニマ欠乏症の厄介なところはね、アニマを相当使いすぎてしまってから発病する事なんだ。」

「使いすぎるって？」

「アニマは借金が可能だって事。0になったら発病するとして、マイナスになってもほとんど自覚なしにドンドン使うことができる。そして寝たら最後、眠り姫になるわけだ。」

「むう……。」

「時空に関する術は地脈に干渉することで発動するが、その際にアニマを消費する。その点ではテレポ・デジョンと過去視は同系統の術だ。」

テレポとアニマの関係は研究が進んでいて、今では簡易測定器で管理できるんだが、過去視は一般的じゃなくてね。僕も残念ながら過去視の専門家ではない。資料はあるけど、僕にはさっぱりだ。悪いけど君たちで調べてくれるかな？」

そして二人はテーブルに残り、資料とノートを睨めっこしている。

ノートに残った記録から、遡った時間と、回数を調べて使用アニメ量を求めるらしい。

そんな姿をミューヌはカウンター越しに眺めていた。渡した資料は、今は行方知れずの十二跡調査会の事務所を整理した時に回収したもの。

あいつらも面白い奴らだったな、元気にやっていればいいんだが、と感慨にふける。

ステンドグラスからの光がオレンジ色に染まってきたころ、二人がカウンターに顔を出した。どうも元気が無い。

「んん？元氣ないねえ。どうだった？」

「最悪……」

「ふーん？」

「目覚めるまで良くて2か月、4か月を超える可能性もあります。」

「驚いた！また盛大に借金したもんだね、彼女。」

「あのバカ、アニメを2000以上突っ込んでんのよ。自覚症状出てたはずなのに。」

女の子の方は少し涙目だ。

「……知らずに無理をさせた僕たちが悪い。マスターありがとうございます。もう少し調べたので資料をお借りしてよろしいですか？」

「ああ、どうぞ。看病の方は手配しておいたから、今後のことについては明日にするとして、

今日はもう帰りなさい。何度も言うけど、時間はかかるとしても、後遺症が残るような病気になるいから、余り深刻になりすぎないように。」

「ありがと」「分りました。」

二人を返した後、ミューヌは腕を組み、呟く。

「2000超のアニメ消費に耐えられるとは、よっぽど時に愛されてるね。となると、彼女が見たものには信ぴょう性が生まれるわけか。いずれ彼らには、大きな仕事を依頼することになるかもしれないな。」

ミューヌの表情は、優秀な冒険者の卵を見つけたときに見せる楽しげな笑みを湛えていた。

大寝坊と事の顛末

『大寝坊』 今日は何日？ すごい陽気

「おはよー！今日はすごく暖かいよ。」

「……あれ？おはよ？なんているの？」

キャプテンがドアの所から覗いている。

一瞬表情がおかしかったのをここで突っ込んでおくべきだった。

「何言ってるの！大寝坊してんだよ！あんた重役出勤するような大物じゃないでしょ！」
確かにおかしい。

今は12月、いくらなんでも、この暖かさはすでに午後の領域だ。飛び起きて、そして目の前が暗くなつて、キャプテンが支えてくれなかったらベットから落ちてた。

「ああ、急かしてるわけじゃないからさ。今日はゆっくりいこ。」
優しかった。

せめてここで気が付くべきだった。

それにしても体調が悪い。とにかく力が入らないのが参った。何とか歩けるけど……休んでもよかったけど、せっかく迎えに来てくれたんだし、学校に行くことにしました。

そして道中で更に驚く。

「昨日はけっこう、雪が積もってなかった？」

「まあ、こんだけ暖かいとねー。」

「え、梅の花が咲いてるよ!？」

「いじょうきしよう、っていうそうねー。」

そして学校について、確かに大寝坊していた事実を知らされた。

だめだ、日付を書く勇気が出ません。おやすみ。

とんでもない大寝坊をした私。こんなことになっていたなんて……。

色々と直視したくない現実と冒険宿での顛末は、すべての事が終わってから聞きました。

そして、更に私は、とんでもない事件の真相を知る事になります。

あーもう、今思い出しても腹が立ちます！

『現実を見つめる』 3月16日 肌寒い

結局私は2回連続で誕生日をスルーしてしまつたらしい。はあゝゝゝ；
過去視つて危ないんですね。

そういえば突然眠くなつたり、逆に妙に目が冴えたりしてたけど、あれが前兆だったのか：
。日記帳は何とかしたいと主張しましたが、「ダメ！」と一蹴。

あと、冒険宿のミューヌさんから、体調が戻ったら顔だして欲しい、と伝言があつたらしいです。まだ叱られるのかな、行きたくないな！。

『大人の事情』 3月18日 怒りのち驚きのち、びみょう

ミューヌさんに会ってきました。

驚いた。新聞破いたの、この人じゃん！

頭に血が上つて詰め寄つたら、

「まあまあ。」

と言いながら私の日記帳まで出てきた。結局この人が悪の黒幕だったようです。

「誰にも言わないと約束するなら事情を教えてあげる。」

と言われたので、日記にだけ吐き出します。誰にも言っていないもん。

リムサに帝国艦隊の救援があつたのは、真実でした。

ただ、同盟関係があつたわけではなく、あくまで帝国の都合だった模様。エオルゼア3国の一角が完全に潰れる事を避けたかったのだと偉い大人たちは分析しているようです。

しかし、リムサには、トライデントという、船の競技で優勝した艦隊を提督と認める、建国からのルールがあります。

空の艦である帝国艦隊が出場してはならないという明確なルールがあるわけではなく、真実が広まった場合に、国民世論がトライデントの開催を要求するかもしれません。

提督も行方不明です。帝国が動かない以上、真実を隠すしかない、との事でした。

「紙媒体での記録を消す要請を受けていてね。新聞についてはどうしても看過できなかった。

ただ、日記を奪ったことについては謝るよ。ほとぼりが冷めれば返そうと思ってたんだが、まさかこんな無茶をするとはね。」

呆れてものが言えません。でも自分がやったことであけた迷惑や、助けてくれたことも事実なので、なんだか帳尻が合わない気がしますけど、日記帳も返ってきたし、引き下がることにしました。

でもここには書く。納得なんて、できません！

エーテライトの先に

あの壁新聞の騒動ではひどい目にありました。

納得できないことも多々あります。

けど……冒険だったとは思います。主役だった感じは全然しないんですけど。

それから私たちの日常は駆け足で過ぎていき。ダラガブの騒乱は第7霊災と正式に命名され、そして徐々に町の平穏が戻っていきました。

そして。

お久しぶりです、エルです。11歳になりました。

今は、第7霊災から間もなく3年が経とうとする、A・E・1570年の夏。
新しい冒険は、チヨコボのソリに載ってやってきました。

『エーテライトが来ました』 7月13日 晴れ

震災からあと2か月ほどで3年の今日。わが森の都に転機が訪れます。

ついに！エーテライトが復活しました！

台座の上に、チョコボのソリで運ばれて来た大きなクリスタルを設置して完成。記念式典が執り行われました。

モードウナという遠い土地で取れる特殊な鉱石で出来ているそうです。

大人たちは「これでテレポが使える」と喜んでたけど、子供のわたしにはリンクシエルが使えるようになることの方がうれしい。

でもちよつと複雑です。

エーテライトが整備されたことで各地の復興に一区切りがついたとされ、疎開事業は震災3年をもって終了、と決定されました。

だから、キャプテンとも裁判長とも、もうすぐお別れです。

LSが復活するんだから、地元に帰った後も、お話できるよね？

『交感』 7月14日 晴れ

昨日からエーテライトの広場には行列でいっぱいです。

テレポを使うには「交感」という一種の契約作業が必要なのですが、なにせ町中の人が登録しようとしてるので作業の終わりが見えません。

「予約制にすればいいんですよ。ここの行政は手ぬるいですね。」

まあ、ウルダハほど人がいないしね、なんて言いながら子どもはのんきに眺めています。

大人は商売が絡んでいるのか割と必死。各地のエーテライトめぐりに出かける商団も編成されていくらしく、大きなチョコボキャリッジが何台も町の外に並んでいました。

あ、本来、テレポの必要が無い子供に「交感」は認められないけど、私たち三人はミューヌさんの計らいで、混雑が落ち着いたら登録させてもらえる事になってます。

まだ遠くの街には行けないけど、近場の行き来は便利になりそう。

ちよっと楽しみです。

【注記】チョコボキャリッジは、地球での馬車に相当します。

そんな大騒ぎの交感作業が一段落した、7月21日のことです。

「やあ君たち、来たんだね。このところずっと暑いねえ。」

エーテライト広場で、ミューヌさんがニコニコして立っています。……黒幕の顔だ。私、エルは即座に臨戦態勢。彼女は警戒すべき大人です。常時デフコン3。

「君は僕に対する警戒を解かないねえ。」

「冒険宿なんて、職にあふれた労働者を低賃金で危険な業務につかせて、報酬掠め取ってるだけじゃないんですか？」

「これは人聞きの悪い。冒険者の力量に応じた手ごろな冒険を、ご近所の皆様方のお困り事から選りすぐって差し上げてるだけです。」

「だからその辺が掠め取ってると……。」

「ま、まあまあ。」

「よしなよエル、せっかく登録させてくれるんだしさ。」

対してキャプテンと裁判長の二人はミューヌに対し微妙に低姿勢です。

尊敬なのか畏怖なのかは不明ですが。

この態度には甚だ不満でしたが、不満を持つ一番の理由に報道規制がかけられているのは、二人に強く言うこともできません。

「まあ……、エーテライトの便宜を図って頂いたことにつきましては、感謝の念を示す事も吝かではありません。謹んで御礼申し上げます。」

「難しい言葉を、難しい嫌味にくるんで使えるんだね……。いやまあ、どうも。このエーテライトは僕の管理だからね、お安い御用さ。」

元々エーテライトシステムは冒険者ギルドが各国から管理を委託されています。

冒険宿のマスターであるミューヌさんがこの街のエーテライト管理者となるのは当然の成り行きでした。

二人の交感作業は終わり、最後に私の番。

手を伸ばし、エーテライトの光を感じ取ります。

そーいえばこの感覚、過去視の光を探す作業とよく似てるなあ。

そして過去視の世界に投げ出されます。そこは圧倒的な絶望感に包まれていました。

「どうだった？」

「……沢山の人が戦ってた。色んな人が……、冒険者のお姉ちゃんも見えた。私は名前を呼んで、手を伸ばしたけど全部すり抜けて……。そのうち赤い星が割れて、中からとても大きな、

おおきな……あれが竜？が現れて、みんな。みんな……！吹き飛ばされた……！」

頭が痛い。

その先を言葉にするのが怖い。

その時、二人が私を抱きしめてくれました。

キャプテンなんか本気で怒った眼をしてミューヌさんを睨み付けてます。

それに気が付いて少し落ち着く。深呼吸してから続けます。

「だ、大丈夫……。その時、青白い光が暴れる竜を一時抑え込んで。巨大な魔方陣みたいな。

でも抑えきれなくて砕け散った。私の立ってた場所は魔方陣の中心から、かなり離れた場所で、全体の様子を見ることが出来ました。」

「そうか、やはり12柱での封印には失敗したのか……。」

「そのあと、魔方陣だった場所の中心から光の柱が立ち上がって行きました。最初は細かったけどドンドン力強い光になって、最後には月に届くような巨大な柱に……。私の位置から見えたのはそこまです。柱の中心で何が行われていたのかはわかりません。そこで過去視は終わります。」

「あんた、分かっててエルに触らせたわね！一体何考え……。」

「まって、私に聞かせて。」

制止して立ち上がりました。これは、私が聞くべき事。

「私を試したんですか？」

「その事については弁明しない。確かに僕をしたことは君を試す行為だ。そのエーテライトの原石は戦場のかなり近いところから取れたものだから、感受性の強い君なら何か見えるんじゃないかと期待した。」

「戦場？いつの戦いですか？」

「空に、巨大な赤い星が浮かんでいただろう？それはダラガブと言って、霊災を引き起こしたバハムートを封印していた卵だ。過去視の光景は恐らく、霊災当日の戦場。」

「あれが、森を焼いた……」

私の知らない破壊の風景。三人それぞれ、思うものは異なります。

だけどそれは幼い日のことで、今突きつけられた現実感とは無縁のものでした。

あんなものとお姉ちゃんたちは戦っていたんだ。いつかLSで話してくれた、私の憧れた冒険世界がこれなんだ。

「僕がずっと気になっていたのは、君の日記に書かれていた『ひかりのはしら』なんだ。あの騒乱の時、そんな巨大なものは一切目撃されていない。過去視能力がある君だけに見ることが出来たと考えるのが妥当と考える。」

「……」

「今の過去視でも視えていたなら、それは『本物』だろう。それも封印失敗後に発生したのな

ら、12柱封印を取り仕切ったルイゾワ氏が使った最後の切り札である可能性が高い。」

「……あの。ルイゾワさん？らしき人は見えなかったんです。中心からかなり離れた位置だったから。ごめんなさい。」

「とんでもない！むしろ感謝してるんだよ。とにかく、当時の様子を現場近くで見た記録は全くないんだ。誰も帰らなかった。」

そこでミューヌさんはしばらく目を閉じます。

『帰らなかった』の後に言葉を続けなかったことが、私にはとても重く感じました。

「だから冒険者ギルド『カーラインカフェ』は、君たちを冒険者と見込んで依頼する。『靈災の日』に何が起こったのか、視て欲しい。ルイゾワ氏が行った行為、冒険者たちの行方……。我々には情報が必要だ。君たちの能力を、貸してほしい。」

ただ依頼されただけなら、断つただろう。ミューヌさんの依頼なんて絶対受けない。

でも、さっきの光景には確かにお姉ちゃんがい었습니다。

光の柱が出来る姿を、体で感じてしまったんです。

なぜこぜの感情を一言でいえば、これが『冒険心』なの？

抑えきれませんでした。

「分かりました、私も知りたいです。協力させてください。何をすればいいですか？」

「サポートの方は僕たちが全て行うから、君たちは過去視に専念してくれればいい。仕事はも

うしばらく先だ。もう夏休みだろう？今はエンジョイしててくれ。」

と、ミューヌさんは少し意味深にウインク。そして。

「ありがとう。協力に感謝する。」

と、子供の私たちがビックリするくらい深々と礼をして、エーテライト広場から立ち去りました。

『しまったあああゝ！』 7月21日 晴れ

ゝゝゝ（ここまでエーテライトでの一件）ゝゝゝ

「エルさん、申し訳ありません。」

ミューヌさんが立ち去った後、唐突に裁判長が謝るので驚いた。

なんで？って聞いたたら、霊災の過去視の件、裁判長の実家も依頼主の一人なんだって。世界は繋がってるんだなあとは思ったけど、別に裁判長の責任でもないしね。それより……。

「あんた、ずいぶん安請け合いましたわね。」

キャプテンがあきれ顔で声をかけてきた。そうです。私は、私が払う「過去視の代償」の事を、すっかり忘れていたのです。

過去の出来事ほど、加速度的に代償は大きくなると教えてもらったことがあります。

私は計算が出来ないので、恐る恐る代償を聞いたら……。

「霊災当日を過去視したんなら、3週間くらい？ま、あなたの分も夏休みはエンジョイしてあげるわね。」

「アサガオの観察日記は僕に任せてください。完璧に仕上げておきます。」

つまり、この日記を書いて、目をつぶったら次は8月の中旬です。

夏休み、半分近く持つてかれた！

青春真っ盛りの少女が支払う代償にしては大きすぎるよ！

やっぱりあの人、黒幕なんだ！依頼キャンセルしたいよぉ〜。

やられた！

ほんとと、勘弁して欲しいです！

結局私は、キツチリ3週間の代償を払う羽目になり、再び眠り姫と相成りました。でも結局、私は「私にしか見れないものを見たい！」という欲求に抗えなかったのですね。

私にしか出来ない冒険だと思ったんです。

そして目覚めの時がやってきます。あれ？ここどこ！？

『まさかの海デビュー』 8月9日 眩しい

最初、微妙に漂う香りに違和感を感じました。そして起きたら、割と高級そうな知らない部屋。どうも寝てる間にどこかに拉致された模様です。

「あ、やつと起きた！海賊の作った海運都市、リムサ・ロミンサへようこそ！」
はい？

窓を開けると、そこは絵本の世界でしか見たことが無いオーシャンビュー。

吹き付ける潮風、きらめく水。ぎらつく太陽と濃い青が印象的な空。見下ろすと港街、大きな帆を広げる大型帆船がいくつも港に、大海原に見えます。

「いい部屋でしょ？あたし達、冒険者ギルドと契約中だから、エオルゼア中の冒険宿とチョコボキヤリッジが無料なんだよねー。しかもアンタが寝てる間は介護名目で、部屋もチョコボも高級ランク、執事付きのVIP待遇！折角だからこちに連れてこようと思つてさ。」

それにしても。

「焼けてるねえ……」

「うん、やつぱ海ね！ここがいつか私が支配する世界よ！」

「えーと、そういうことではなく。」

まあいいや。なんだかんだ言っただけで私もあちこち街を回って、海で遊んで、自宅にお呼ばれして。起きたばかりだから泳いでないけどね。楽しかった。

「ところで裁判長は？」

「アサガオで学術論文作るって張り切ってたから、グリダニアに置いてきた。よく分かりませんが、夏休みの研究課題は任せておくことにしました。」

『過去視の限界点』 8月10日 やっぱり眩しい

「あ、そうだ。私、リムサまでのエーテライトとは交感してくれたの？」

「それはだめ。自分でやんなさい。」

あっさりと否定された。ケチンボだ。

「えー？」

「えー、じゃないわよ。あんた自分が眠り姫になった原因忘れてるでしょ。」

「……あ。」

つまり、またエーテライトに過去視の光が潜んだりしたら危ない、ということですよ。ちゃんと集中して、「エーテライト」と「過去視」を見分けてから触らないと。

「そうだよー。過去視はちゃんと深さを測ってから。特に、4年がギリギリ限界だからね。そ

れ以上は絶対ダメ。」

「なんで4年？」

「4年潜ると、代償が8週間。2か月近い。過去視に人生捧げるつもりは無いよね？」

「そりゃあ……。」

「それに、4年を過ぎると、1日遡るごとに代償が一気に膨らむ。5年潜ると、2年くらい眠り姫よ？」

「ええ!？」

「だからミューヌさんには『潜るのは4年が限界、あと、眠り姫の期間は年間3か月まで』と言っておいた。本当は1か月だつて重いんだけどね。」

私が寝てる間に、色々と交渉してくれたみたいです。そして最後に、申し訳なさそうに、ごめんね、つて言う。私が決めたことなんだから気にしなくていいのに。

ありがとうね。

このころの私はまだ、自分が引き換えにしているもの、二人にかけている心配、それがとても大きなものと、本当の意味で理解していませんでした。

アニマ欠乏の本当に恐ろしいところ。

それは「眠り姫」の間、心の記憶を残せない、ということ。

私はまだ、どこか他人事でした。

さて、このあと私達はウルダハに向かいましたが、ここリムサの地では靈災の日、政治的に大きな事件？騒ぎ？が起こったそうです。

もともと私たちにとっては別世界の出来事ですけれど。

政治の世界って怖いなあ……。

断章 放たれたクサビ

A. E. 1570年9月5日

時は少し未来の、靈災から丁度3年経ったリムサ・ロミンサ。

第7靈災と名付けられた初めての年の慰靈式典は、特に被害が大きかったリムサで行われることになった。各国から来賓が訪れている。

その中の一人の存在に、緊張感が高まっていた。

(……くそっ、ここで来たか。)

リムサ軍令部総長、エインザルは苦虫をかみつぶしている。

招かれざる来賓はガレマール帝国軍、第XIV軍団長ガイウス・ヴァン・バエサル。先の靈災では帝国領土にも被害が発生したという名目で、帝国代表として出席していた。

「先の靈災においては、我が国も独自に防衛艦隊を派遣したが、力及ばず各地に被害が発生した。ここに改めて、犠牲者に対する哀悼の意を表する。」

「ダラガブ事変は、貴国の将校が引き起こしたのではなくて？ わらわの国に幾度も兵を差し向けておいて、いまさら何を申し開くおつもりかしら？」

真正面に立って凄みを効かせたのは、ウルダハ女王、ナナモ・ウル・ナモだ。気品は申し分ないが、いかんせんラファエルが帝国将校に対峙するには無理がある。

「ネールの企てが靈災の一因となったことには、帝国としても遺憾である。彼奴の軍団は解体され、ネールについても行方を調べているところであるが、関係者はことごとく行方不明であり、真相の解明には難航している。」

なおもナナモは強い視線を浴びせたが、どちらも動じる気配はない。グリダニアの代表が間に入り、やっと場が収まった。

「我が国も皇帝の指示の元、可能な限り防衛に尽力した。リムサ・ロミンサは我が艦隊が近くを航行中だった事もあり、直接指揮を執ったが、辛うじてミズンマスト防衛に成功したとはいえ、我らの力不足で市民に多くの犠牲が出たことを陳謝する。」

「謝られる筋合いはない！」

思わず、エインザルが声を上げる。

その直後、他国代表から視線を集めたことに強く後悔した。

「い、いや、国家の防衛は我らの義務だ、ガイウス殿が気に病むことではない。お気遣い、感謝する。」

「時に、貴国では、提督の選出は何時行うのか？長らく提督が不在で在られるようだが。」

「！……、それは内政干渉か？」

「私の純粹な興味にすぎぬ。貴国では『トライデント』という競技で提督が選出されると聞く。開催されるのであれば、ぜひ招待願いたい。」

「招待……それは、選手としてという事ですかな？」

「ははは！そこまでの気概のあるものが我が軍にいれば、ぜひ参加させてみたいものだ！だが、我はただ、見たいのだ。トライデントという競技を。」

「なる、ほど……」

「それが貴国の行く末になるのであろう？」

場の参加者はこの会話を、ただ見守った。

帝国の思惑を計らなければならない。

エオルゼア諸国の中に帝国になびくものが居ないか、見極めなければならない。

それぞれの思惑が交錯する中、慰霊式典はその後、肅々と執り行われた。クサビは放たれた。エオルゼア諸国の協力関係は保たれるだろうか？

過去との会話

時は再び8月に戻ります。舞台はリムサからウルダハへ。

私たちはこの地で、偉大な賢者、ルイズワさんを過去視するための準備を行いました。

『ウルダハへ』 8月18日 蒸し暑い

リムサを出発して4日間。船とチョコボを乗り継いで、ウルダハに到着。

ウルダハのエーテライトを交感して……。

「さ、グリダニアに帰るわよ。」

え、観光とかしないの？と思ったんだけど、9月になったらまた来るんだって。テレポ使えばすぐだもんねえ。ちょっと味気ないけど。

そして。

今はグリダニアの自室。机の上には、ず～～～～と放置されている夏休みの宿題。

え、これ、今からやるの？……嫌ですよ！今日は寝ますよ！

『ウルダハへ（２）』 9月2日 やっぱり蒸し暑い

ウルダハリターンズ。裁判長のテレポに便乗して私のアニメは温存。

大人がテレポ登録に必死なのがちょっとわかった気がします。これ便利すぎますね。

今度の過去視は、ルイゾワという偉大な術士の方が残した石を調査することになっています。裁判長は会ったことあるそうです、すごい人だつて！

今回調査する石も、ルイゾワさんから直接託されたものらしいです。

これはちょっと特殊で、記録が残ってる本体側は見た目普通のリンクパールですが、ウルダハに残った設備を利用して、9月5日に見るように、という指定がありました。

「増幅装置的なものか、あるいは重要な情報だから勝手に見られないよう、封印のために分離してるのか。そんなところじゃない？」とはキャプテンの見解。

確かに、石だけを調べても、光らしきものは全然見えないんですね……。本格的な調査は明日という事になり、後は、ぶらっと観光の一日でした。

『ルイゾワおじいさんの光』 9月3日 雨

測定結果は、1566年9月5日。私の過去視限界ギリギリの4年前でした。これを見れば

8 週間の眠り姫が待っている。

「……」「……」

二人とも押し黙ったまま。

大丈夫だよ！ちよつと見てくるだけだから。そうは言ってみただけど……。

私もちよつと怖い。そのところは隠せてたはずだけど。

あと、ひかりかたが、これまでと全然違う。太陽みたい。

普通は淡い光で、4年分の深さだと探すのも一苦勞なんだけど、今回は、石を装置に設置した途端、ものすごい勢いで光りだしてビックリしました。

これ、触って変なこと起こらないかなあ。まあ、どっちにせよ覚悟を決めて触ってみるしかない。9月5日に見ることが決まってるので、今日も観光……に行こうと思ったたら。

「夏休みの宿題残ってるんですよ。手伝いますよ。」

そうですね、昏睡期間があったので提出の猶予は貰ったんですが、こういうの、免除はしてくれないんです。ウルダハまで来て、学校の宿題してるなんて……。

宿題……。

ちなみに、普通の授業の宿題も普通に出ます。

つまり、しばらくの間、宿題の量が当社比2倍となります。

全く語られることはありませんが、数か月の間宿題地獄が続きました。

ええ、語るもんですか！

……どうでもいいですね。

過去視は霊災の日に行くことになりました。この日の過去視、そして、過去視の後に目覚めた日の出来事は、今回の冒険でとても大切な思い出です。

『過去との会話』 9月5日 4年前は晴れてました

今日の日記はレポート辺なので長いです。

過去視を行った場所は、霊災前は十二跡調査会という団体が本拠地としていた場所。建物は霊災の破壊から復旧されていますが、組織としての調査会の方々は、行方不明のままです。

過去視の先には、ルイズワおじいさんが居ました。

本がいつぱいの書齋で、魔法装置の調整をしているようです。

どうせ向こうはこっちが見えてないので、後ろから近づいてのぞきこんでみます。

「こんにちわ……ルイズワおじいさん、かな。」

「おや、きたようじゃな。いらっしやい、お嬢ちゃん。」

ええええ！？思わず飛びのいて、本の山に手をかける。

もちろん現実世界ではないので崩れるようなことはありません。

でも、ルイズワおじいさんはまっすぐこっちを見ている。え、過去の風景だよね？

「驚かせてしまったようじゃなお。なに、ちょっとした魔法じゃよ。話をしたかったのにな。少し、いいかの？」

「……はむ。」

「お嬢ちゃんは、いつから来たのかな？」

「えっと……？年号のことなら、A・E・1570年9月5日、丁度4年後です。」

「ほう、ここが4年前の世界という事を自覚しておるのか。なかなか優秀なようだ。」

「いえ、そんな……」

ルイズワおじいさんは4年後、私たちの世界の状況を知りたいようでした。

出来る限りのことは話しましたが、私には難しいことも多くて。

また来るから、質問をどこかにまとめておいてほしいというと、メッセージを封印した魔法

装置を準備する、とのこと。その時気が付きましたが、おじいさんの操作していた魔法装置は、過去視を行ったそれです。

封印解除呪文を教えてもらい、私は元の世界に戻りました。

一連の出来事を説明する。みんな、驚いたり考え込んだり。

「……で？ルイゾワ爺さんから状況は聞き出したの？」

「あ!？」

ああーっ!こっちの情報話すばかりで聞いてなかった!

平謝りしながら、魔法装置に呪文を唱える。ルイゾワおじいさんの肉声メッセージ。

ほっ、ちゃんと状況の説明もしてくれてる……。1年後と思われる危機的な状況、対策の現状、未来の状況の予測と私たちへの質問。

かなり詳細で、私にはちよつと追いつけませんでした。

きつと多分、キャプテンと裁判長がメモをしたので大丈夫でしょう。あんまりサボってる
とキャプテンに怒られるので取れるだけのメモはしたけど。

次の過去視の日時も指定されていました。3か月後、また潜ってほしいとのこと。少し
間が空いてるのは、私の負担をルイゾワさんも気づかっているんじゃないか、とは裁判長。

今、過去視ができるのは私だけみたいですし、頑張るしかない、です。

ではおやすみなさい。みんな、健康には気を付けて。

眠り姫の一日

「……今日は何日かなあ。」

目覚めてから最初に考えたのは、何日寝てたのかって事。寝る前の日付は9月5日で、眠り姫は8週間の予想だったから……、えーと10月末か11月初旬ってとこか。ふむ。

ほふん。

枕を持った両手の勢いを借りて、前かがみに背を上げる。部屋と窓の風景を見て、とりあえず場所が変わっていないことを確認した。サプライズが無いことにホッとして少し残念だったりしながらベットから出る。ここで違和感に気が付いた。

（あれ……立ちくらみしない？）

それなりのサポートはしてもらえるけど、それでも長期間の眠り姫生活は体力を相当奪う。ベットから身を起こすだけで目の前が真っ暗になる事もあった。

その感覚がまったくない。単なる目覚めのいい朝だ。ん？

リンクシェルに残った最新の過去視の光は、私が日記を書いてる姿だった。その位置を見て確信する。今日は9月6日、つまり普通に翌日だ。

あれ？代償無し？

疑問符でいっぱいになっていたらノックの音。あわててベッドに潜り込んだ。

「エルさん、おはようございます。おやすみですか？」

起きてます、とは言えず寝たふり。

裁判長がブレックファーストを運んできました。

そうだ、このまま今日1日、眠たふりをしてお姫様気分を堪能しちゃえ。私はそんなことを考えたわけだ。よせばいいのに。

【朝ごはん】

(∴これ、起きていいの？食べさせてもらうの待つの？)

いきなり難題。あれ、自我が薄いつてどんな状態なわけ？聞きかじりの知識しかない。

せめて前回の眠り姫を過去視で予習しておくべきだったと後悔しても後の祭り。

心臓バクバクです。

せめて動悸が収まってからじゃないと演技もできない。

しかも裁判長出ていかない。

仕方なく、なんとなく無気力な感じで体を起こしてみました。

「ああ、おはようございます。朝ごはんありますよ。」

（生返事は出来るんだよね……。いや、ここはあえて呼びかけは無視して食事に直行か？）

迷い一瞬、事故一生。スプーンを取ろうとして落としてしまふ。

拾いに……。行ったらだめー！寸前で手を止める。あ、急制動過ぎたかな……。

「今朝はシリアルにしてみました。僕は牛乳に浸して柔らかい感じが好きですが、エルさんはどんなのが好みですか？」

そんなこと言いながら、ずっとスプーンを拾い上げ、別のスプーンを取り出してベットの脇に腰掛ける。そしてお皿を手にとって……。え、近いんですけど。

「さあ、どうぞ、お姫様。」

そのあとはあんまり記憶になく。

口を動かすことに集中してろくに味も感じない。全部食べて、部屋に一人になって、やっと心地。裁判長って男子なんだ……。わ、ちょっと意識しちゃったぞ。キャプテンとくつつくんじゃないかと思ってたし、あんまり異性って考えてなかったんだよね。

（……でも、お姫様って言われるの、悪くない。）

やっぱり女の子の憧れですからー。

もうちょつと我がまま言えたら良かったんだけど。眠り姫だしね、仕方ないか。

【トイレ】

そして大ピンチ。

（トイレの場所を知らない！）

裁判長の実家だけど、この部屋の周辺に何があるのか把握してなかった。

仕方ないので、無気力な感じで外に出る。

無気力な感じにさまよってみる。

15分経過。

（わあ……わあ……どうするのこれ……）

泣きそう。

「あら、どーしましたかお姫様。」

キャプテンが通りかかった。

うな……ずかない。自我が薄い、私は自我が薄い……。

え、これでどうやって伝えるの？目をまじまじと見つめられたあと。

「ま、徘徊してるのはいいていトイレなのよね、きて、こっちよ。」

そのあととは何か。トイレの扉に鍵をかけられないのがちよつと落ち着かないけど。

ふう……。

多分これ、また連れ帰ってもらうまでジツとしてれば良いのよね。

廊下に出たら車いすが用意されてた。あれ、どこにいくの？

【ウルダハ・ランディング】

「ここからの景色はお勧めですよ。これ以上となると王宮に上がらない限り見ることはできません。」

と裁判長が話しかけてくる。

ウルダハは確か、一度壊滅的な破壊を受けたって聞いている。

それなのに、3年経って、もうほとんど元通りになっているんだね。昨日見た過去視映像と建物の雰囲気が全然変わってないので、震災なんて無かったんじゃないかと思うほど。

「市街地はほぼ元通りになったんですが、外の風景はだいぶ変わりましたね。一番の違いは鉄道が引かれたことでしょうか。」

震災前より進歩してるし。……でも、素直にきれい。

光を反射しながら、飛空艇が乗り込んできた。

いつか乗りたいなあ。

「いつでも案内しますよ、姫。」

目線おっちゃったのばれたかな？ちょっとヒヤッとしながら視線を前に戻す。多分ずっと、私がこんなだった時も、何とかして私の心をくみ取ろうと、話しかけてくれたんだろうな。

返事を返すことができないのが、もどかしい。

【勉強】

勉強なんてどうやるのかって？

私も疑問でしたよ。

起きた後、学校ついていける……というかむしろ直後のテスト、凄く良かったもの。
睡眠学習でした。ガチです。

国語と社会・歴史担当が裁判長、算数理科・地理はキャプテンの担当。

ワンポイントレッスン！

意識があるときに睡眠学習を受けると、すぐ寝ることができます。

こういう場合効果あるの？

【お風呂】

なんていうんでしょうか、これは……、もつと雑に扱われていると思ったんだけど。

まさにお姫様扱いというか……。

自主的に動かないので侍女もついて湯船に入れてもらったり、全身洗ってもらったり。キャプテンが結構頑張ってるのにビックリです。

【晩御飯】

ほっておいても枕元に食事があれば食べてる、って聞いてたので、正直もつと、ほっとかれてると思つてたんだよね。

でも、ここまでの食事は全部、誰かが付いてくれた。今もわざわざテーブルまで連れてきてくれる。二人とも私に話しかけてくれたり、さりげなく食事を運んでくれたり。

あと喧嘩とかしてたりして。

やっぱり私を間に挟んでやりあうのよね！

あーもううるさい！私の仲裁をあてにするな！

なんて、言えないんだよ。

私はアニマを失つて、回復するまでは何を思つても伝えられない。

怒れない、悲しめない、喜べない。

寝たり食べたり、生理欲求を何とかする程度。

あーでも、今日のスープ美味しいなあ。

パンもパリッと焼けてるなあ。

美味しいね、って言いたいなあ。

やだ、涙出てきた。拭つたりしたら、ばれるよね。

もう一口。スープを口に入れる。

美味しいなあ。

「……ったく（パコッ）」

「てっ!？」

キャプテンに小突かれ、声が出ちゃった。あ、確実にばれた。

「昨日の過去視、代償はルイゾワ爺さんの先払いだったんでしょよ。」

「ああ、なるほど。色々ありえない状況でしたしね、そのくらいの仕込みはありそうだ。」

眠り姫って言われて、悪い気しなかったの。

朝ごはん、シリアルは堅めの方がよかったなあ。

トイレは最初に教えておいてください、泣くかと思った。

ウルダハの復興は凄いな。

飛行艇もいいけど、鉄道に乗ってみたいな。

えっと、歴史の授業ほとんど覚えてないの、もう1回教えて……。

それとキャプテン! シャンプー目に染みるよ! もうちょっと配慮して!

喧嘩も私を挟んでやらないで!

「……なにっ、何も、ひっ、言えない、の。伝えられない、って、こういう事？みんないるのに、私もいる、のに。居ない。ここにはいない。何、何も、伝えられないんじや、ひくっ、いないって事？でも、居るのに。私、眠り姫って、こんなにつらいの？私は、私は、こんなにっらい思っていたの？」

泣きながら、それでもなんとなくスープを口に運んでいた。

美味しいね、美味しいね。

どこかの料理評論家みたいな気のきいたセリフなんて出ない。

それでも、言葉を止めたくなかった。心を伝えるって本能的な欲求なのかなあ。

キャプテンが頭をなでてくれた。

「まあ、自覚できたんならいいわよ。あんたいつか、取り返しつかない代償払う事になりそうだったからね。」

「スープもおいしいですが、こちらの魚もおすすめですよ。」

裁判長は食事をお皿に取ってくれた。

何事もなかったように食事は再開されて。

やっぱり私はお姫様のように、ちよっとチャホヤされました。

……でも、眠り姫はもうこりこり。

【就寝前に】

：：：なんで続けているの？二人に車いすで運ばれてる私。あの、歩けるよ？
そのままベットに寝かされる。

「さあ、眠り姫。夜の学習のお時間ですよ。」
はい？

「歴史の授業をご所望とのことでしたので。さあ、今日は中世ウルダハの庶民文化についてお
さらいしましょう。」

ゆっくりとお風呂を堪能して。

食事でおなか一杯になったところに。

暖かいベットに寝かされて。

ささやくような歴史の授業を受けたら。

寝ますよね。

「こら寝るな（パコッ）」

「てっ!？」

寝ることのできない睡眠学習の夜が更けていく。何この拷問。やだ、た、助けて！

もう一度出会うために

色んな意味で忘れられない日になったこの年の9月5日と6日。それから私たちは地元に戻り、それぞれの日々を送りました。そして12月。再びウルダハに集まります。

『2回目のルイゾワさん』 12月5日 寒いね

久々のウルダハです。

9月で疎開事業が終わったので、みんなそれぞれの国に戻ってます。

でもエーテライト便利すぎ。LSで会話できるし、アニメを消費するとしても会おうと思えばすぐだし。ただ、三人が一度に揃うのは3か月ぶりでした。

「さて、爺さんに伝える内容はちゃんと暗記してきた？」

「う……。」

再開の余韻など浸らせてくれず、まずは伝える内容の確認。

ノートも持っていないので、私が覚えるしかないで……。二人の鬼チェックが終わった後、やっと過去視の時間になりました。絶対こっちの方がアニメ消費してる。

そして4年前の世界。

これまでの過去視はただ再生するだけです、これはもはや、実際に4年前に降り立ってる。当たり前のようにルイゾワさんと会話してるけど、そんなのあり得ない。

おじいさんは未来から情報を得ているのです。

どれだけのアニマの代償が必要なのか、想像すらできません。

相変わらず緊張しながら、私は何とか、覚えたことを話しました。

：：なんだかルイゾワおじいさんはニコニコしてます。

変なこと言ったかな？ちよつと不安になって聞いてみる。

「わしが一番うれしいのは、お嬢ちゃんが4年後の世界から来たという事なんじゃよ。」

「私が？」

「わしの力はちっぽけなものじゃが、それでも、4年後を守れた。守れる未来がある。苦労が報われることがやる前にわかるといえるのは、楽しいもんじゃのお。」

「それって、相当ズルっこだよ、多分。」

「わはは、言われてしもうた。そうじゃなあ、ズルじゃな！」

二人で笑う。でも、時間は限られていて。

おじいさんの導きで会えるのはこれで最後だそうです。多分、私が代償を払えば会うことはできるんだと思うけど、無理をしてはいけないと諫められました。

これが今回の過去視。

一通りみんなに報告して、今後のことは明日話し合うことになりました。

そういえば、私も明日参加できるんだね。

アニメを失えば、明日を失うことになるんだよね……。明日があるって普通に思ってたけど、ルイズワおじいさんは、明日ってどんな日に感じてたんだろう。

『行きたい場所』 12月6日 我がまま天気

二人と喧嘩しちゃった。

どうしても、霊災の日のルイズワさんに会いたい。

自分で我儘だとわかってて、それでも強硬に主張した。それで、怒らせちゃった。あの二人相手に理屈で言い負かすことなんてできないから、ただ我儘に言い続けるしかなかった。

二人が怒る理由もはつきりしてて。

多分、とても危ないんだ。

まず現場に行く必要がある。そこは大人でさえ近づくのは容易じゃない。ましてや子供の私たちがいくには、それなりに街道が整備されるのを待つ必要がある。

計画は進んでるけど、まだ半年以上先になりそうです。

そして過去視の期間。現場に到着できる時期を考えると4年を覚悟しなくちゃいけない。

単純に私にかかる負担が大きい。

過去視後はアニマがマイナスでテレポに同乗するのも危険だし、寝てる状態の私を連れて帰る必要がある。

私が危険で、周りにかける迷惑も大きい。二人が反対する理由としては十分だ。

そのうえで、私は最後の手段を使っちゃった。ミューヌさんに直談判した。真実を知りたくないかと。

まあ、そんな感じで、もう二人は取り付く島もない。もう手伝ってくれないかもしれないなあ。今、グリダニアの自室に戻ってます。もう、泣けてくるよ。あはは。

『一緒に』 12月20日 星が綺麗だったよ

私の誕生日。二人が私のところに来た。

来てくれるって。

今日はこれだけしか書けないや。

この日、私は星芒祭の準備に追われていました。

私、誕生日が祭当日に近いせいで、いつも祭のついでお祝いみたいになっちゃって、20日にお祝いしてもらったことが無かったんです。

1回だけ、友達が20日に準備してくれたことがありましたが、爆睡状態でスルーしてしまいました。そもそも誕生日がスルーされがち。……いいもん、別に。

孤児院の子供たちにとって星芒祭はとても大事な、楽しいお祭り。年長組になっていた私は、ケーキやお菓子、飾り物やプレゼントの準備にでんてこ舞い。

本気で自分の誕生日のこと忘れていました。

「エル、いる？」

その声にビクツとする私。

ルイゾワさんの件で揉めてから、私は怖くてLSにさえ出ていません。

キャプテンが顔を出します。

「あ、あれ？こっち来てたんだ？」

「相変わらず、貴方は雑用を押し付けられてるようですねえ。」

裁判長まで顔を出す。

ズバツと言わないでください。押し付けられてる自覚から現実逃避中ですので。

「うー、だって、星芒祭は大事なんだよ。親が居ないからこそ、良い子には良いことが無いと

だめなんだよ。」

「仕方ないわねー。取りあえず全部片づけないと始まんないわね。裁判長、そっちゃつてよ。」

「分りました、完璧に仕上げて見せましょう。」

「え?…あ、ありがとう?」

それからあれやこれやと三人で取り掛かり。終わったころには日が落ちていました。でも、当日に行う飾りつけや料理の仕上げを残して全部終わっちゃった。

手を洗って、エプロン外して、台所を出たら、私の部屋に中々きれいな飾りつけ。

「わあ、仮で飾りつけてみたの? 良い感じだね、みんなも喜ぶよー。」

「誕生日、おめでとう!」

…え? キョトンとする私に、二人が言葉をつなげる。

「リムサ・ロミンサ、12月お取り寄せランキング1位のドードーチキンロースト! これ、この時期予約取ると大変なんだからね、感謝しなさいよ。」

「ウルダハでひいきにしているケーキ職人がいまして、そちらで手配したホールケーキです。見た目はシンプルですが、味は保証しますよ。」

その他にもいくつか用意したんだかパンやサラダやシャンパンとか食べ物いっぱい。

「その…。」

「ロウソクに火を入れるから、灯り消して消して！」

「分かりました。エルさんはこちらに。」

テーブルを三人で囲み、ささやかなパーティが始まりました。そういえばしばらく前にもこんなことがありました。あのときもお姫様みたいにチャホヤされて……、

「……ま、まさかここから、こないだみたいに睡眠学習とか酷い仕打ちの流れ!？」

「どんだけ鬼なのよ私たち。」

「ここでボケは不要です。さあ、ロウソク付けましたよ。分かってますよね。」

「……」

白状すれば、きっとこれが人生初のロウソク消し。緊張のあまり情けないことに4回も息を吹きかけて、やっとすべてのロウソクを消しました。

「さ、とっとと食べるわよ！セルフサービスねー。」

「ふむ、意外と冷静でしたね、もう少し泣きの展開を予想していましたが。」

「へ？あ、あの、嬉しいよ？すぐ。でも、驚いちゃって。」

「誕生日に縁が無い子だからねえ。折角用意してもすっぱかすし。」

「ぐ、その節は、ご迷惑をおかけしまして……。」

「まあ今さらね。そんでさ、誕生日プレゼントなんだけど。」

「え？」

ちよつと期待。

「キャプテンとの協議の結果、今回はパスすることになりました。」

「えー！」

思わず立ち上がった抗議の声。皆さん、プレゼントは要求するモノではありません。このような態度は大人げないので公の場では控えるようご注意ください。

「そのかわり、星芒祭のプレゼント交換するわよ。」

「エルさんにも用意していただきます。それでいいですね？」

「あ、そっちな……。」

え、でも用意って？疑問が出かけましたが、そのまま言葉は続きます。

「三人で、約束しよう。私たち三人で決戦の地に行くこと。」

「そして、僕たち三人で帰ってくることに。」

「……」

「さあ、エル、貴方は何をしに行くの？」

そう言いながら、三人は輪になって、キャプテンと裁判長が手を中心に差し出します。二人が私を見ている。私はおそおすと、自分の手をその上に乗せました。

「さ、三人で、霊災の日のルイゾワさんに会うこと！」

「一緒に！」

キャプテンが声を上げる。

「一緒に！」

二人で追いかけた。キャプテンほど熱血入っていないのは玉にきず。

「はい、お約束の熱血展開終了。これプレゼント交換替わりね。」

一番熱血だった人はクールでした。

「エルさん、ケーキ切り分けたいのでナイフ用意してもらえませんか？」

「え、あ、ちょっと待ってね。」

「さあ、今度こそ食べるわよ！」

どうやら泣かせの演出だったみたいですが、私は泣きそびれちゃったようです。

誕生日会の後、二人はその日のうちに地元に帰り、今は部屋で一人。

日記を取り出して今日一日を振り返ります。あ、そうだ、天気を確認しないと……。

窓の外には、ハツとするような綺麗な星空が広がっていました。

キンと冷えた、透き通る空気。

雲の無い空から、星の光が差し込んでくる。

そのまま椅子にすくと座る。

タイトルを書いて、日付を書いて、天気を書いて……。

突然、涙がポタポタ出てきて。

慌てて日記の残りを書いてベットに潜り込んだのでした。

その日を境に、私たちはそれぞれ、自らを鍛える日々が始まりました。凄腕の冒険者になる必要はありませんが、それでも最低限自分を守るよう、力を付けなければなりません。

これから向かおうとしているのはそんな場所です。

私は小さいころから幻術の素養があると声を掛けられていました。それと弓。三角測量で鍛えた命中率が評価され、目下この2つのクラスを特訓中。

森を歩き回るのに向いた組み合わせなので、割と楽しんでいます。

裁判長は呪術一筋の模様。

「幻術は覚えなの？」

と聞いたところ、

「フィールドワーク無しで理解できるのは呪術だけ」

とのこと。少しは運動した方が良いと思うんだけどなあ。山登りスキルが必要だとは思わないけど、決戦の地は峠を越えた先でしし、きつと痛い目にあうんじゃないでしょうか。

一方キャプテンは槍と斧を鍛えてると聞いてます。元々海賊志望のキャプテン、昔は斧一辺倒だったらしいですが、グリダニアにいる間に槍に目覚めたとか。

もつともキャプテンはやろうと思えばどんなクラスでもそつなくこなします。ある日、

「サバイバルで便利だからね。」

って言いながら、1日でファイア覚えていました。

卒倒しそうになりました。

私がどれだけ習得に時間をかけたと思ってるんですか！

私に過去視能力が無ければキャプテンがスーパーヒーローでヒロイン確定です。私は過去視能力と大事に付き合いたいと思います。

一方、いつ決戦の地を目指すのかについては、二転三転していました。私の過去視負担を考えれば一刻も早い方が良いでしょう。ですが、道中のエーテライト整備が遅れていました。

エーテライトの効果範囲から出てしまうと、テレポもデジョンも使えません。そんな場所に子供を送るわけにはいけない、というのが冒険者ギルドの立場。

最終的に、夏に出発して、霊災から4年後の9月5日に過去視が出来るよう準備する、という計画が立てられました。結構先の話になっちゃいましたね。

冬から春、夏と季節は廻ります。

この間もなかなか興味深い冒険があったりしましたが、それはまた別の機会に。

そして8月。私たちは再び、ルイゾワさんを目指します。

チョコボと流砂のダンジョン

「ごめん……、ちょっと、強がる役、交代してもらえるかな。」

「こーいうときは、私くらいおバカなくらいが良い？」

「ははっ、そこまで言ってないわよ。」

キャプテンが珍しく弱気。確かに、ちょっと最悪の状況。私は精いっぱい苦笑いで、彼女を見下ろしてる。この状況になるまでには、数刻を遡る必要があります。

A・E・1571年8月22日 お昼過ぎ

「ノコギリ峠が通れない？」

「どうも、土砂崩れがあったらしい。旧ブルーフォグ側から回り込むことになりそうだな。」

「だが、ブルーフォグ側は地脈が乱れて……」

ここはナナワ銀山を超えて、北ザナランに入ったところ。私たちは第7霊災の決戦の場所、カルテノー平原へ向かっています。冒険者ギルドの手配でキャラバンが生まれ、ウルダハから

ここまでずっと、荷台の中で揺られてました。

今日で5日目。まだ半分も進んでないみたいだけど、私たちは完璧に暇で暇で暇でした。ちなみに裁判長は乗り物酔いで死んです。

さて、どうもトラブルがあったようで、キャラバンは一時停車中。ふと見ると、キャプテンが一羽の若いチョコボに話しかけてる。慣らし中とかでキャラバンに同行させてる子が居て、キャラバン隊長のチョコボの後ろにずっとくっついてるんだよね。

「君もさ、そろそろ親離れしないとだめだぞー。」

「クエー……。」

「あと、隊長チョコボ君。甘やかしたいのはわかるけど、いつまでも手元に置いとけるわけじゃないんだから。ちゃんと突き放さないと。」

「……クエックエエ。」

この人たち、喋ってるんですけど。

「冗談よ。」「クエツ。」「クエツ。」

一糸乱れる連携で会話していたことを否定される。

うん、偶然だ。そう思うことにします。

「お、話し相手になってくれるのか。」

「こんちわー。この子、乗っていい？」

そこにキャラバンの隊長が戻ってきた。

キャプテンに裁判長に隊長に書記長に……そろそろややこしいなあ。

「別料金がいいか？」

「うわ、ケチな大人がいる！」

隊長もなかなか面白い人でした。

相談が終わって、やっと出発進行！

キャプテンはチョコボ君の手綱を引いて、私も暇つぶしに歩いています。

坂を上り切り、少し開けた平地。砂地っぽい場所に、ノンアクのサボテンダーがウロウロしてた。1匹が近くにいる。

……ちよつと！チョコボ君がちよつかいだした！

「いだだだだだ！」

「クエエエー……ッツツ！」

巻き込まれたのは私・キャプテン・チョコボ君・キャラリッジを引いてる大人チョコボ2羽・御者の6人（羽？）。

「いた、ちよつと、止まりなさい！いたた！」

「わ、わ、わ！」

子供二人の制止も虚しく、大混乱のチョコボ君は砂地に足を踏み入れ……。

「え!？」

あろうことか、二人と1羽は、流砂の罠に、一気に飲み込まれたのです。

「あんたまで来ることもなかったのよ。」

「……ごめん。」

「この隊の目的は、あんたを連れていくことなのよ、分ってる?」

「……ごめん。」

私たちは砂の洞窟の中。

落ちてきたはずの穴が見当たらない。

しかも面倒なことに……。

「だめだ、LS使えない。地脈が乱れてるって言ってたなあ、そういうば……。」

「乱れてると使えないの?」

「そりゃそうよ、都市間通信網は地脈を利用してるんだから、地脈が使えなければただの石。

最悪、リタイヤしてデジョンする手も考えたけど、それもだめかあ。」

「デジョンもだめだよ。ここまで5日かかってるし。」

「そ。引き返して戻ってたら霊災の日が過ぎちゃう。何とかして出るしかないって事。……で、その子は大丈夫?」

「うん、ケアルガで回復したよ。良かったね。」

「クエツ」

混乱の原因を作った子は呑気なもので。キャプテンはチヨコボ君を呆れ顔で見ながら、
「チヨコボ君。まだあんたは運が良かったんだからね。」

「どうということ？」

「この子がひとりで落ちてたら、見捨てられてる。」

「！そ、そんなことは……。」

「それが大人の判断。」

「クエ……。」

言い返せない。

「でもさ、私たちは子供だ。我がまま通すわよ。みんなでここを出る！」

「！うんっ。」「クエツ！」

気合を入れなおした。がんばろう！

「あれか……、LSを見つけました！」

僕は荷台で瞑想していた。手には探査石。

過去視の測定機材を持ち出して、本来の目的で使う。

地下に飲み込まれた彼女たちのLSを探したのだ。

幻術か呪術の素養があれば使うことが可能である。

「よし、向こうも気づいた。隊長！状況のやり取りをしたいので、地理に詳しい人こちらに回してもらえませんか？」

探査石を手旗のように振って、向こうのLS（多分キャプテン）の手旗とやり取りした。

幸い怪我はないようだが、状況は良くない。

- ・今いる場所の近くに、カッターズクライという迷宮がある。
- ・落ちたのはその支流である可能性が高い。
- ・流砂は一方通行で、出るならカッターズクライの出口を目指すしかない。
- ・捜索隊を編成中。到着にはしばらくかかる。
- ・すぐ危険が無いようなら動かないように。

「とはいえ、ずっと動かないわけにはいかないだろう。」

「流砂は捕食のための罠ですからね……。」

と隊長たちが話していたが、案の定……。

「まずい、動き出したようです！」

「分った、君は瞑想を維持して、光を追い続けろ！隊は迷宮の入り口を目指す！」

「分りました！」

チョコボに鞭が入る。急げ！隊は一路、流砂迷宮へ向かった。

一方そのころ私たち。

突然現れた敵から逃れるため、二人を乗せたチョコボ君は必死の疾走です。

「わあああああつつ！？」

キャプテンは槍、私は今は幻術。

二人とも杖代わりに持ってた武器。私の弓は残念ながら荷台の中です。

「左、弾いて！」

「っ！ウオーター！」「ギエツ！？」

接触しそうな敵を幻術や槍でけん制しつつ、でたらめに迷宮を駆け巡ってる。

「捕まったら終わりよ！根性！」

「キャプテン！これどこに向かつてるの！？」

「チョコボ君に聞いて！……いや、そこは右！」

「クエツッ！」

キャプテンの手綱さはきで、チョコボ君は右に進路を取る。

「道分るの？」

「今、裁判長と確認中！」

やっぱり二人は凄い。

この状況で探査石の手旗信号だけで会話を維持できてる。

「って前に大穴だよ！」

「飛べえええええええ！」

「クエエエエエエエエッ！」

チヨコボ君渾身のジャンプ！

短い羽を巧みに利用し、その姿は大空を自在に駆け巡ったといわれる竜騎士のごとく……2秒ほどですが、素晴らしい滑空で何とか超えてそのまま奥に。

追手は穴を超えられないように、そのまま見えない位置まで移動して難を逃れました。けど。

「あー、流石に裁判長、振り切っちゃったか。」

「そっか……、しばらく連絡とれないね。こっちの位置も見失ってるだろうなあ。」

「だから鍛えとけって言ったのにさ。」

「瞑想に体力関係あるの？」

二人、目を合わせてくすつと笑った。こっから正念場です。

そして冒頭に戻る。

私たちは、あまり良く無いルートを選んじやったみたい。

少し進むと広場があった。

明らかに他を圧倒するような巨大なアリに、多数の働きアリが群がってたので、通路に引っ込んだのだけれど……。

「後ろ、何か来てるね。」

敵が大穴を飛び越えたのか、穴が埋まったのか。

キャプテンは地面に耳をつけて音を探ってる。

まだ遠いけど、ここまで一本道のはず。後ろに下がることもできなくなりました。

私は少し体を乗り出して、前方の広間の様子を確認してます。

「ごめん……、ちょっと、強がる役、交代してもらえないかな。」

「こーいうときは、私くらいおバカなくらいが良い？」

「ははっ、そこまで言ってるいわよ。……まあ少なくとも、広場はまずいわね。狭い方がまだまし。」

「どうするの？」

「後ろを奇襲しよう。私が距離を測るから、10mまで接近したら飛びかかる。いいね？」

目だけで合図して、私たちは臨戦態勢を取りました。

前衛はキャプテンとチョコボ君、後衛は私。

最後の曲がり角から10m離れて、暗闇に潜む。

「50m……30……15……」 「クエッ……」

（光？）

その時、キャプテンのLSから伸びるものに気が付きました。

水平？

その先には通路……。

「10！」

「クエエエエ！」

「す、ストッププー！」

「うわあああ！？」

間一髪セーフ！

……ではなく、約1名、チョコボキックに顔が地面に埋まつてる。

「……オーバーキル？」

「ブハッ！死んでません！ゲホッ！」

あ、裁判長だ。砂地にハマっただけだった。

ともかく、私たちは何とか無事に、捜索隊と合流したのでした。

そこから凄かった。

流砂迷宮は最後までいかないと出口が無いらしく、私たちは本気の冒険者のすごさに圧倒されっぱなし。捜索隊は大人12名編成、私たちの護衛には4名。

本隊の8名はばっさばっさと敵をなぎ倒して……。

気が付いたらボスまで倒して外に出てました。

「別にキマイラさん倒さなくても、普通に出ればよかったよね？」

「迷宮に入ればボスを倒す！これが冒険者のロマンなのよ！」

「炉辺の石のように、ついでも倒されるボスが哀れだ……。」

「同感です。」

不可抗力ということで、おとがめはなかったけど、移動中に荷台から出ることを禁止されちゃいました。キャプテンは窓から身を乗り出して、チヨコボ君と何やら雑談中。

そこに隊長が乗ったチヨコボが近づいてきました。

「やあ、助かったよ。コイツを失うところだった。」

「大人はすぐに諦めるからね。」

「まったく。ただ、我々の任務は君たちを届ける事。済まないが到着まで、おとなしくしてくれ。」

「はいはい、分かってるわよ。」

「クエッ！」

騒動を起こしたチヨコボ君の一声。キャプテンと隊長は目を合わせ、

「コイツも乗せて貰えるか？」

「冗談！場所が無いわよ！」

隊は進む。目的地はまだ、峠をいくつか超えた先……。

ねがいを、そらに

でっかいトラブルもありましたが、私たちは何とか決戦の荒野にたどり着きました。

荒野に広がる、私だけに見えるその光景。

それは余りにも美しい、悲しみに満ちた、終末の幻想でした。

大地に刻まれたアニマの光は、命の輝き。

過去に残された光たちを、私はただ、呆然と見下ろします。

『敷き詰められた思い』 9月2日

私たちは今日、決戦の地にたどりつきました。

ここは昔、ブリトルバークと呼ばれた前線基地だったそうですが、今はただ、見晴らす限りの荒野となっています。

大人たちがキャンプの設営に追われている中、私はその荒野を眺めていました。

「どんなふうに見えるのですか？」

と裁判長が横から声をかけてきた。

「過去視で見たときは月に届くような一本の巨大な柱だったんだ。

でもここから見ると、細い柱が沢山ある。近くで見るとこうなってるんだね。

あと、下にばかり伸びてて、上の方はタケノコみたいに顔だしてる感じかなあ。」

「このあたり一帯は、エーテライトやLSに使われる高品質なクリスタルが取れます。

だからアニマの光が石に刻みこまれたんでしょう。」

「……こうやって見てるとね。

光の柱の根本に、色んな色の小さな光が比べ物にならないくらい沢山、本当にたくさんヒカリゴケみたいに敷き詰められてるのが分かるんだ。柱になってるのは、ほんの一部なんだよ。」

「視たらダメだからね？」

そこにキャプテンが顔を出して忠告。

分かってるよー。

「それだけ、ここで沢山の人の思いがぶつかったって事よね。もうすぐ4年かあ。下は4年分だとして、上はどのくらい？」

「キャプテンじゃないんだから、ちゃんと測定しないと答えられないよ。」

私は苦笑い。

キャンプテンはあつそう、と口に笑みを浮かべてから、さりげなく休憩しようとしていた裁判長を引っ張っていきました。あら可哀そう。

私の仕事は明日からなので、今日はのんびり。

出来上がったキャンプはとても本格的で、お風呂まで設営されててビックリ。気持ちよかったー。

あとは、日記をつけておやすみなさいです。

『お守りの石』 9月4日

明日は震災があつた日。

私は昨日から、現場に散らばる光を宿した石を調べていました。

絶対見つける必要があるのは、ルイゾワさんの光を宿した石ですが、これはすぐ見つかりました。柱が伸びてない、他に比べて極端に強く輝く光だったからです。

あと、個人的に一番大事な、お姉ちゃんの光を宿した石。

沢山の光の中から、お姉ちゃんのリンクパールの光と似たものを探します。

でこぼこの荒野の中、一人で探すのはとても大変でしたが、いくつか候補を拾い上げ、最後にキャンプに持ち帰って、まったく同じ色を宿す一つの石を特定しました。

光の柱だったときは泣きそうになりました。

途切れてない。

何の確証もないけど、光柱を残している人には未来がある。そう感じてたから。すぐにでも会いたかったけど、これを視たら本来の目的を果たせなくなります。

私はこの石をお守りとして持ち帰ることにしました。

会いたいよ。お話ししたいよ。

そして9月5日。

私は霊災の日に何が起ったのかを、過去視の力を用いて調査しました。
以下は報告書の内容です。

私が見た「真実」を、主観のまま報告します。

その光景は、1年前に見たものと同じ、絶望の風景。

違うのは、私の傍らでルイズワおじいさんが戦っていたことです。

空に踊るバハムート。なすすべもなく見上げる冒険者たち。

この場所はちょうど高台で、リムサやウルダハの様子がかすかに見えます。竜の速度は尋常ではなく、あらゆる場所を薙ぎ払っているように見えました。

その怒りが、ルイズワおじいさんに向けられる。12柱召喚！私も祈っていました。世界を救って！……結果は知ってたのに。

そう、封印は失敗します。

そしてバハムートが怒りの咆哮を上げたとき、おじいさんはさらに杖をふるいました。

おじいさんが唱えた呪文に、一柱の神が答えます。

それは、アルジク。重力と時間をつかさどる帝王。

お姉ちゃんも、ほかの冒険者たちも、次々と燐光に包まれ、そして消えました。消えていく……一人ひとり、そして引き換えに光の柱を残して。

「……時を……渡る……かがり火だったんだ……。」

光が現在で途切れずに未来まで伸びていたのは、時空転送魔法を使って遥か未来まで転移させたから。そう、光の柱は、未来へと延びるアニメの輝きが集まったものでした。

だから、私にしか見えなかった。山と森の果て、グリダニアから見ることできた。

柱は垂直にそびえたち、天頂を消失点にして無数に増えていきます。

もはや世界は、バハムートが放つ禍々しい光に包まれました。

でも、光柱はかき消されない。

だってそれは、心に直接届く光で。

新生の未来へ届ける希望で。

それはまるで……

唐突にルイズワおじいさんは詠唱を止め、空を見上げました。

なんで？ 貴方は逃げないの？ 飛べるはず……!!

そう思って、声をかけようとして……、そして、分ったんです。

おじいさんにも見えてるんだ。願ったんだ。

消えない流れ星に。

もはや音も無い光柱だけの世界に、おじいさんの声が聞こえました。

「未来から来た嬢ちゃんや、ここから先は危険じゃ、帰りなさい」

「で、でも、おじいさんは!？」

「なに、少しばかり沢山願い事をして、罰は当たらんじゃろう？」

そして世界が途切れます。

これが、私が見たすべてです。

光柱の長さは今日の計測では、過去に4年、未来に1年分でした。

霊災から丁度4年経っています。そして1年後。

必ず帰ってきます。ルイゾワおじいさんが繋いだ希望が。

A. E. 1571年9月5日 決戦の地にて エル・カナン

リアルお姫様ライフ

決戦の地での過去視。この時はルイゾワおじいさんの力を借りていないため、キツチリ代償を支払わされることになります。

そして目覚めた私。まさかここまでビックなサプライズを仕掛けられるとは……。ビックリ仰天の顛末の模様は日記をどうぞ。

『リアルお姫様ライフ（1）』 10月29日 風が気持ちいい晴れ

うん、分ってたよ。私が寝てる間に何か仕掛けるだろうって事は。

ある程度覚悟して目を開けたんだけどね。

なにこれ。

シルクの天蓋ベッドに、大理石の上に赤いカーペットが敷き詰められた豪華な部屋。冬になつたら使えそうな暖炉もある。

調度品もいろいろあって、下手に触ったら大変なことになりそう。

着てる服も亜麻布っぽいし、細かいレースの刺繍も入ってて。昔、裁判長の家に泊まった時に用意してもらった服も高級品っぽかったけど、それが庶民の服に思えるような。

ちよつと体を起こしたらやっぱり眩暈がするので、普通に8週間寝てたようだけれど……。この体調で動き回るとどう考えても大惨事を引き起こそうだったので、体を起こすだけに留めて窓の外の景色を眺めてた。

「おはようございます、姫様。お目覚めでございますか？」

これは、本格的にお姫様ごっこを仕掛けられましたかね。

綺麗な侍女さんが登場。まだ眩暈がするので歩くのが不安だと伝えると、朝は部屋で食事をとることになりました。暖かいものが欲しいと少しわがままを言ってみると、ホットミルクと、牛乳・卵・砂糖漬けのパン。上品な甘さでふわトロですよ。

侍女の人はずつとついてくれていて。私が体を慣らすために室内でゆっくり歩いたりしているのをサポートしてくれました。「二人はいないの？」と尋ねましたが、今日はこちらに来る予定は無いとのこと。あら、残念……。

「昼食はどうされますか？」と聞かれたので、多分歩けるから出る、と伝えました。それからの話は明日の日記で。

『リアルお姫様ライフ（2）』 10月30日 今日も良い天気

そろそろ昼食なのでお着換えください、と言われる。

なんかすごいドレス出てきた！

そして出たら更にすごかった。え、なにこの、総大理石造りの廊下。

：：：そういえば、部屋の窓からの景色がやけに高い位置だったけどと思いつつ、廊下の窓をふと見ると、ウルダハランディングが下に見える。

えーと、ランディングより上って王宮しかないよね：：：。昼食は広間で取るとのことで、相当覚悟して入室。覚悟はそれでも足りませんでした。

「やっと起きたか、過去視の姫。わらわは待ちくたびれたぞ！」

「えっと：：：、どちらさまですか？」

ここが王宮である可能性を自覚していた私にとって最悪の質問。

偉い人に違いありませんわ。ラフェルさん相手だとどうしても親近感を持ちすぎる私をこの時ほど後悔したことはありません。

「ふふふ、お互い名乗るのは後回しじゃ。まずは親交を兼ねて食事を取ろうではないか。」

「は、は：：：、いただきますっ。」

でもお腹空いてたんだよね。

豪華な食事に手を付けながら、親しげに投げかけられる質問に、ついつい話が弾んじゃって。ララフェルの姫は、ことのほか靈災時の様子を知りたかったようで、特に不滅隊指令局長のラウバーンについての事をよく話してた。

私が消息について決定的な情報を持っていないことに残念がってはいたけど、彼の武勇を目をキラキラさせて話す彼女の姿には好感が持てた。ラウバーンさんは大事な人なんだね。

そしてそろそろ、いくらなんでも気が付いている私は、それでも話を切り出せず。……現ウルダハ王朝ってララフェル族でしたよね。

「……あのっ！これまでの非礼をお許しください！王家ゆかりの方とお見受けしますが、なぶん私はこの地の知識が無くっ！」

「わらわは、ナナモ・ウル・ナモ。ただの女王に過ぎぬ。そなたのような力も持たぬ、ただの人間。顔をあげるのだ、過去視の姫よ。そなたはもつと胸を張っていいのじゃぞ？」

ウルダハトップかー。やつぱりそうですかー。……でもそれより、何か寂しげな響きに違和感を感じて、私は顔をあげました。

あれ、なんだか長くなったね。更に明日に続けます。

『リアルお姫様ライフ(3)』 10月31日 曇り

「まだ話したりぬのお……。そうじゃ！庶民のおなごは、『ぱじゃまばーてい』とやらをするのであらう？わらわの部屋で続きを楽しもうぞ。部屋に茶と菓子を用意せよ！」

「はい？え？そのお？」

昼間っからパジャマパーティーもないと思うのですが、そこに突っ込む余裕もなく、歓談の舞台は女王様のベットに移りました。

服もパジャマ……。だと思うんですが生地が別格の高級寝巻が用意され。うわー、この寝具豪華だなあ。紅茶こぼしたら大変なことになりそうだし。

と、緊張してたのですが、女王様の人柄ゆえか、エル・ナナモと呼び合う仲に……。さすがに私は様付けですよ。ただ、少し気になったのは、女王様といえど、ウルダハのトップというわけでは



ないという事。

「ウルダハはお金ですべてが動く国。王家といえど、その掟には逆らえぬ。ラウバーンはわらの数少ない味方じゃったが、あれも靈災で行方不明じゃ。今のわらわは、女王という肩書だけ。孤立無援のおなごに過ぎぬ。」

「ナナモ様は、この国を守ったじゃありませんか！あの靈災で壊滅的な被害の中、人的被害を奇跡的なくらい最小限に抑えたって聞いてます。私が裁判……友達のレレセナ君と出会えたのだって、きつと女王様のおかげ！ウルダハの人が、ナナモ様を肩書だけの女王だなんて思ってるわけない！……あ、ありませんよっ。」

「……そうかのお？わらわも、まんざらじゃないかのお？」

「そうですそうです！ラウバーン様もきつと帰ってきます！」

そんな感じで、侍女が付いてお菓子やお茶がいくらでも出てくる豪華絢爛なパジャマパーティー？は楽しく時が過ぎて。丁度今日、私も日常生活に支障が無いくらい体力が戻ったので、グリダニアに戻るようになりました。

そうそう、二人とはLSで連絡とったんだけど、元気そうでした。裁判長とくらは会えるかなって思ってたんだけど、都合がつかなくて残念。

自室に戻ったの、何か月ぶりだろう。

女王様には失礼だけど、やっぱりこのベットが一番落ち着くよお。おやすみ！

断章 世界を動かす力

A. E. 1571年11月1日

ウルダハの予算会議は、極めてシンプルだ。王家と砂蠟衆が集まり、それぞれが必要と思う項目に、必要なだけの金をつける。金の量が発言力に直結していた。

「……帝国への警戒、蛮神や謎の塔の調査など含めまして、軍事費として20兆ギルを要求します。」

「ふむ。いくら出す？」

女王ナナモは議場を見渡す。その問いかけに対し、各自が回答した。合計は1兆ギルに満たない。

「何じゃ、辛気臭いのお。よい、残りはすべてわらわが出す。全額認めよ。」

「ははっ。」

予算要求者は一礼をし、場から退場した。

「よいのですかな？」

場の一人が声をかける。

「なんじゃ？」

「国庫が底をつくのではないかと……。」

「ああ、そうじゃな……。うむ。200兆ギルほど用立てたい。誰ぞ、わらわに貸さぬか。」
場内がざわめく。何人かが利率などを提示し、ちよつとした競売になる。しばらくのちに契約は交わされ、ナナモはその場で書面にサインした。

会議はその後も滞りなく進行され、閉場となった。砂蠍衆がみな退場した後、側近の一人が遠慮がちに声をかける。

「陛下。恐れながら申し上げます。」

「何じゃ？」

「そこまで軍事費は必要でしょうか？」

「必要と思うたから金をつけたまでじゃ。」

「しかし、今日の会議では王家が付ける予算が特出しておりました。借りてまで予算を付ける必要があつたのでしょうか？」

「あ奴らは、金の力を見誤っておる。ため込んでるうちはただの財布よ。いくらでも引き出せばよい。」

「しかし、これ以上の借入は王家の権威を損なう恐れが……。」

「かまわぬ。」

ナナモは一蹴する。

「人を動かすのは何かわかるか？」

「？」

側近達は首をかしげた。

「力だ。」

何を当たり前のことを……？しかし、女王は続ける。

「金も、心も……、動いてこそ力になるのじゃ。ぶつかり、砕け、全てを押し流す。その荒ぶる様に、人は惹かれる。自分の力をぶつけてみようと感じる。貯め込んでいても何も見えぬ、何も感じぬ。自分で動かぬものに、王の資格は無い。」

はっとして側近達は顔を上げる。

「わらわは黄金都市ウルダハの王。世界で一番、金を動かすもの。民はわらわに魅せられ、わらわのために金を動かすのじゃ。その奔流が集まる限り、わらわの力は揺るがぬ。」

その目に、力が戻っていた。

つい先日まで宿していた不安の色は微塵もない。

王としての確固たる自信に満ちている。

側近達は鋭い眼光に射抜かれ、慌てて頭を下げた。

「わらわ以上に多くの金を動かすものが現れたなら、わらわは喜んでこの王位を受け渡そうぞ。」

しかし、あ奴らはその器ではない。気にせずともよいわ。」

ナナモは踵を返し、玉座を後にする。その姿が消えても、側近達は傳っていた。

（過去視の姫が『未来』を見たのだ。4年耐えた。あと1年などあつという間じゃ。わらわは止まらぬ、待っておれ、ラウバーン！）

星が生んだアニマの力を操るもの。人が生んだ金の力を操るもの。世界が力の奔流に再び飲み込まれるまで1年弱。竜たちはそれぞれの力を武器に、戦いに備えていた。

アニメって何？

こんな感じで、今回の冒険は終わりを迎えました。

ただ、いくつか考えさせられることがあって。

アニメとは、力なのでしょうか？

私がずっと見てきたアニメは、とても身近で、ささやかで、大切なものでした。

霊災から4年を過ぎ、5年目を迎えた私の日記には、そんな疑問への自問自答がいくつかあります。

『ルイゾワおじいさんは何を願った？』 11月4日 紅葉が綺麗

キャプテンからLSに連絡がありました。

決戦の日のルイゾワおじいさんの行動に、「何か引つかかるな……。」とずっとぼやいてたんだけど、今日、「やつぱりおかしいわよ！」と。？

「5年は飛ばし過ぎ。」

「どうして？」

「気になって十二跡調査会の資料を確認したんだけどさ。逃がすだけなら未来へテレポさせる必要ないじゃん。未来に飛ばすにしたって、アニメの消費は一人当たり50も無いのよ。」

「どれだけ未来でも？」

「うん。一時的に仮死状態にして地脈に飛ばして、時間が来たら元に戻すんだけど、アニメを消費するのは最初と最後だけで、年数はほとんど関係ないのよね。」

「へー。……うーんと、復興するのが5年後くらいって読んだとか？」

「それもおかしい。5年後がどうなるかなんて、神様じゃないとわからない。バハムートが一瞬先の未来を崩そうとしている状況で、5年先を心配するのは理屈に合わない。」

へえ……？ 続きは明日の日記で。

『アニメ借金王』 11月5日 雨模様

「推測できる状況は二つ。彼には少なくとも、3〜4年先の状況が分かっていた。エルを通じてね。」

昨日の日記の続きです。キャプテンが推測する、ルイズワおじいさんの行動の真相。

「基本的に、未来を知ることが膨大なアニメの借金に繋がるみたい。エルと会話することは、

相当大的なリスクだ。どこかで借金を返す必要が生じる。」

「!……そ、そんな風には見えなかったけど。」

「そもそも、ただ記憶を見てるだけのエルと会話することがほとんどありえない状況。秘術でもあるんでしょうけど、いずれにせよエルとの2回の接触……決戦の時を含めれば3回ね。接触には膨大な代償を支払う必要があったはず。それでも彼は、『少なくとも3〜4年先まで大きな動きが無い』状況が作れることを知っていた。」

「……」押し黙る私に、キャプテンは続ける。

「もう一つ。冒険者全員の『5年分』のアニメを、彼は必要とした。」

「え？」

「未来に飛ばした冒険者たちにも、アニメは供給される。だけど、仮死状態の間、アニメは不要なの。ここまでは分かるね？」

「うん。」

「冒険者全員の5年分の『アニメ』を担保に、地脈の力を一度に引き出したとしたら？」

「!?で、でも一人の人間がそんなこと……。」

「そうね。人間がそんなことしたら、体の維持が出来るとは思えない。魂すら吹き飛びかねないけど……。それだけのアニメを使って、バハムート相手に何かをした。」

「そんな……。」

「何をしたかはわからない。拘束したのか、契約なのか。いずれにせよ絶大な力を持つはずのバハムートは、世界を滅ぼさなかった。エルを最後まで立ち会わせ無かったのは、アニメが集中しすぎて危険だったからでしょ。大したじいさんねー。」

改めて言葉を失った。すごい人だ。

そんな人と数回でも会話をできる機会を得たことに感謝しないと。

「そんな借金して、昏睡しなかったのは凄いなあ。」

「それは簡単。不眠の魔法でもあったんでしょ？呪術とか調べたら普通にありそう。」

「あー。そういえばルイゾワおじいさんの肌荒れ、ひどかった気がする……。」

「そっち……！(笑) アンタは一生かかってもじいさんに追いつけないね！」

「無理無理！お肌の方が大事なもの！」

最後の方、感謝のかけらもなかったことはこの日記だけに伏せておきます。

『アニメの売買について』 A. E. 1572年5月7日 五月晴れ

最近、冒険者ギルドのテレポシステムに新技術が導入され、アニメ消費の効率化と、アニメをギルドで買うことで移動制限を解除できるようになりました。

ちよつと思うことがあるので書いておきます。

アニメを他人から受け取ることができる技術は、そもそもルイゾワさんが持つ秘術が、私の過去視を通じて再発見されたものです。

その時はほとんど心に留めていませんでしたが、インスピレーションを受けたウルダハ呪術ギルドの一派が、研究改良を重ね、実用化に至ったと聞きました。

便利になったと思います。でも、やり取りされるアニメが「正當なもの」なのか、私にはわかりません。表向きはアニメを余らせた人の小遣い稼ぎだとされていますが、私はアニメが「自分の限界と無関係に引き出す事ができる」ものだと思っています。

例えば、どうしようもない借金と糧として仕方なく引き出したとしたら？

余命幾ばくも無い人が「どうせ死ぬなら」と寿命以上に引き出したとしたら？ 便利だからと、全ての人が星から「踏み倒す借金」を繰り返せば、星はどうなるんだろう？

私が過去視で失った時間に後悔してるわけじゃない。

ルイゾワおじいさんの行いを否定するわけじゃない。

実用化した研究者たちは凄いと思う。

だけど、私が開けてしまった箱は、本当に未来を明るくしてくれるのかな。

帝国ではアニマの取り扱い技術がずっと進んでいて、意図的に人からアニマを限界まで奪うことで奴隷化しているという噂さえあります。

今回導入された技術は、帝国の姿勢を肯定することに繋がらない？

アニマが無いと心は伝えられない。

いくら心が無傷でも、伝える手段が無ければ、そこに心は見つけられないんだ。

他人のアニマを、たとえ対価を支払ったのだとしても、奪い取る行為は正当化できないんじゃないか？

今は答えが見つからなくて。

こないだからずっと、小骨が刺さったような感じです。

わたしの冒険

そして霊災から間もなく5年。私はこのころ、ずっとウキウキ。帰ってくる！

帰ってくる！

みんなが、お姉ちゃんが帰ってくる！

そればかり。

おかげで、とんでもない失態をすることになりましたが……。

『あれ？』 9月5日

霊災から5年。ルイゾワおじいさんの転送呪文が目指す未来の日。

式典は粛々と執り行われ、あとは冒険者が帰るのを待つばかりでしたが……。

今は夜。日記に書くべき出来事は何も起こらず。あれ、あれ、あれええええ？

『誤差だ!』 9月6日

さすがにまずいと思って、お守りの石を測定しなおし。

誤差があったああ!

今日はあちこちのLSで、報告と平謝りばかりでした。

戻ってくるのはもうちょっとだけ先。油断してたよ……。

誰も私を責めないんです。

むしろ少しくらい文句言ってくれた方が気が楽になった気がします。

……いえ、私が悪いんですね。反省してます。

そして、改めて、待ち望んだ日がやってきました。

「そろそろなんだけどなー……」

5年前の過去から未来へ延びる光の先端は、もうほとんど目線の高さに降りていました。ちなみに一番下は遥か下方、下手に触れると膨大な借金を背負いかねません。

お守りの石は、普段は手元に置かないようにしています。

つぎり霊災から丁度5年に帰ってくると油断していましたが、考えてみればあの戦いの中、そこまで厳密に魔法を使う余裕などあるはずが無いのです。

あわてて測定しなおした結果は、今日の深夜3時ごろでした。それからかれこれ1時間。窓の外に目を向けて、私は何度目かのあくびを飲み込んでます。

北の空に流れる流れ星に、私はぼーっと視線を向けて。

何個か数えてから、慌てて手元の石を机に置きました。

(あれはテレポの光だ！)

北に窓はありません。

今見えているのは、沢山の冒険者たちを5年後に飛ばして、最後にしかるべき場所に転送しているアニマの力。エーテライトの力を借りないので、その燐光は北の空から直接、流れ星のように見えると予想されていました。

お守りの石からも光が飛ぶはず。お姉ちゃんがいるのは、きっとその先です。

(…：飛んだ！)

一瞬の残光を見逃さず、飛んだ方向を机にチェック。すぐに地図を広げ、同じ方向に線を引きました。そのあと私は、祈るようにお姉ちゃんのリンクシエルを確認します。

光ってる！私は飛びついて名前を連呼、ほとんど叫び声でした。

「わあああ、なに、なに、エルちゃん、どーしたの？」

「やっと繋がった！心配したんだから！ばかあああ……」

「あー、そーかそーかあ、ごめんねえ。」

5年経っても、その声は変わらずどこかノンキ。怪我してない事を確認した後、迎えに行く
と伝えると、

「迎えにつて……、まって、外は危ないよ！大人に伝えてもらえばいいから！」

と慌てて拒否の声が返ってきました。

そうだ、お姉ちゃんにとって私はまだ8歳。心配はかけたくないし、でも驚かせたい。

私はちよつと考えてから、

「えつと……、あのね、わたし。地図とお星さまの見方、教えてもらったんだ。知り合いの大人の人に伝えるから、そこからみえるおほしさま、おしえて？」

と、ちよつと舌足らずに喋ってみる。

「……ん？」

やば、なんだか不思議ちゃんみたいな感じです。8歳児の演技は諦めて用件だけ伝えました。

いくつかのやり取りをして、地図にもう一つの直線を引いて。

ここにいる。幸い、エーテライトを使えばそんなに遠くない場所でした。

ここなら……

「待っててね。火事で色々変わってて危ないから。エーテライトも壊れてテレポ使えなくなってるから。知り合いの女の人が、昼までに迎えに行くって。動いちゃだめだよ。」

「ありがとー。じゃあ適当に野宿してる。来てくれるのは私が知ってる人？」

「知ってるけど知らない人！」

「？」

これ以上話すとボロが出そうで、少し強引に会話を切りました。

私の身長はとくにお姉ちゃんを超えています。

すぐに気付かれることは無いはず。

抱き着いてびっくりさせようか、ちょっと大人の女性を演じてみようか、あれこれ想像しながら装備を用意して。

「あとは……、えーとこの引き出しに……。」

最後の荷物を詰め込んだ私は、テレポを唱え、アニマの輝きに身を任せます。

迎えに行くんだ。鞆いっぱい5年分の冒険をつめて。

『冒険者のみんな!』
みんな、おかえりなさい!

9月17日 流れ星

(エルの日記 完)

あとがき

終末ムービーのルイゾワさんの最後の視線の先が気になって、その時心に浮かんた光景がこのシリーズの始まり。「ねがいを、そらに」が一番古い原稿ですねえ。

未来へのテレポは、どんなふうに見えるの？未来と過去はどんなふうに見えているの？

FF14では、「未来」と「過去」にある背後の世界設定はかなり強固なものと感じています。でも、旧14では過去視の謎について、導入にすら到着していません。第7霊災から新生までの5年間を使って、過去視の背景を掘り下げてみたのが「エルの日記」です。

ロードストーン連載時の14章構成は最初から決めてましたが、進めるにしたがって「アニマ」の概念が思ったより重要なことに気が付きました。アニマの掘り下げをしてたら予想以上にギリギリの構成になってしまつて、恋愛要素を突っ込めなかったのが残念です。

さて、今回の電子書籍化についてですが。

元々ロードストーンの日記用に連載していたものを、小説フォーマットにするにあたり大幅に構成を見直し、加筆修正を行ったものです。

ロードストーンの日記で1回ずつ見る分には大きな問題はなかったと思いますが、やはり改めて見直すとあれやこれやと破綻がありまして……。『ねがいを、そらに』に繋げることだけが目的だったことがばれればです（涙）

時間軸を入れ替えたり、ストーリーテラーをエルに任せたり、新エピソードの書き下ろしもあったりしますので、ロードストーンからお付き合い頂いてる方にも楽しんでもらえたかな？とちよっと思ってます。いかがでしたか？

もしこのシリーズの続編を書くとしたら、新生後の未来ではなく、やっぱり「新生までの5年間」のどこかを舞台にしましょう。この期間はエルたちにとっての新雪。スクエニさえ踏み込むことのない、永遠のオープンワールドですから。

となると、『冒険者のお姉ちゃん』の出版は永遠に来ないことになるのかな（笑）ともあれ、ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。これにて完結です。

月鐘
ねいと

エルの日記

月鐘 ねいと

アートワーク

シエルデイ

扉絵・キャッチ

ヴァン